
東方魔刀矧

エッジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方魔刀矧

【Nコード】

N4059T

【作者名】

エッジ

【あらすじ】

大事な家族を殺された少年は怒り、封じられたある刀を手に入れます。そして、その力で復讐を容易く成し遂げました。されど、得たものは何もなく、少年はただただ消えてしまいたいと嘆きます。そんな彼は、とある一つの別世界に行き着きます。しかし、たどり着くと同時に少年の精神は乗っ取られ――。

この話は『上海アリス幻楽団』様の『東方Project』シリーズの二次創作兼幻想入り物です。そういう物にアレルギーをお持ちの方は、お控え下さい。

初太刀

降りしきる雨の中、刀を振り、血を払う。
親と妹の仇の血が地に落ちた。

「……ちくしょう」

空を見上げる。

今日は新月だ。

タダでさえ暗い夜が、雨雲のせいで更に暗く感じられた。



ある日、本当に何でもないある日、家族が殺された。

大きな古い日本家屋で、お金がありそうだということで、強盗殺人の的になった。

殺す前に聞いた話では、親父が抵抗してきてムカついたから皆殺しにしたらしい。

笑えない話だ。

俺はたまたま家に帰るのが遅くて、生き残った。

生き残って、独りになった。何時も通りに家に帰ったはずなのに、帰る居場所は無くなっていた。

父は居間で撃たれて死んでいた。
母と妹は押し入れの中で身体中を刺されて死んでいた。
独りぼっちになって、膝を抱えて泣いた。

警察が来て、保護されて、捜査が始まって。

数日で犯人が分かった。

だが、犯人は捕まらなかった。

大きな大きな暴力団の首領の息子だったらしい。

だから、人が数人殺された程度では、捕まえられないらしい。
ふざけるなど、思った。

保護施設を逃げ出して、自宅に向かった。

警察の人間は、運良くいなかった。

家は荒れていて、金品の他に家宝だった日本刀も無くなっていた。
そしてもちろん、家族の姿も無かった。

俺は家の庭の隅の隅にある祠に行った。何重にも貼られた御札
を剥がして、ビリリと急に腕が痺れても、構わず剥がして。

祠のドアを開けた。

中には、一本の刀があった。

親父に何度も聞かされた。

『この祠にあるのは、刀だ。みんなみんな殺してしまう、妖刀だ。
だから、私達狭野家で、守らなきゃいけない』

決して札を剥がしてはいけない。

決して祠を開けてはいけない。

決して刀を握ってはいけない。

残る言いつけは一つだった。

でも、家にはもう刀は無かったから。

言いつけを破って、俺は刀を取った。

その時俺は、一番大事な言いつけを、完全に忘れていたと思う。

父親から、刀の扱いは教わっていた。

男の居場所は警察の話盗み聞きして、知っていた。

やるべきことは、やらなきゃ済ませられないことは、決まっていた。

刀を携え、突然降り始めた雨の中を駆け抜けた。

男は街の裏路地で男の人を仲間の数人と共になぶっていた。

家族を殺した時のような下卑た笑みを浮かべて。

それを見て、ブツリ、と。

確実に、切れてはいけない何かギレてしまったと思う。

感情に身を任せて、刀を鞘から抜き放つ。

その瞬間、真っ黒な何かに、呑み込まれた気がした。

その後の意識は曖昧だ。

刃を返し、峰で男共を薙ぎ払って、薙ぎ払って、叩き潰した。

気がつけば、男の取り巻きはあっさりと撤退していた。

なぶられていた男の人も逃げ出し、その場には自分とあの男しか残っていなかった。

俺は刃を返し、男に切っ先を向けた。

罵声と怒号を俺に吹きかけ、男は懷から拳銃を取り出した。

きつと、親父を撃ち殺した拳銃だったと思う。

その銃口が俺に向けられるのに合わせて、俺は踏み込んで銃身を斬った。

鉄にしてはあまりにもあっさりと、銃身は半ばから落ちていった。

男は目を丸くし、拳銃を捨ててナイフを取り出した。

きつと、母さんと妹を殺したナイフだったと思う。

俺はナイフが向けられるより先に俺はナイフをはじき、地面につき落とした。

男は手を抑えながら、恐怖に満ちた目でこちらを見る。

俺は特に考えもなく、何故ウチの家族を殺したか尋ねた。

追い詰められているのを理解しながら、男はふざけた解答しか返さなかった。

刀を持つ手に力が入り、刀を振り上げた。

その瞬間、ゾワリ、と。

身体中に寒気が走ると同時に、頭の中に真っ黒な何かが入り込んで来た気がした。

男の喚き声やズレた命乞いも耳に入らず、身体が勝手に刀が振り下ろし始めた。

その時必死になって刀を振り下ろすのを止めようとしたのは、何故だったのだろう。



見上げていた視線を落として、血だまりの中で死んでいる男を見る。

何も感じない。

むしろ、虚しかった。

ここにきてようやく、家族がもう死んだというのを、自覚する。

かと言って、恨むべき相手はもう、殺してしまった。

自分のどこかに大きな穴が開いたまま、塞ぐ術を失った気分だ。

感覚が閉じていく。

もはや、自分が今どちらを向いているのか、立っているのかどう

かも、曖昧になる。

次第に意識も薄くなり、目の前も暗くなっていった。



——我が……………

不意に頭にノイズが走り、鞘にしまった刀の重みが増した気がした。

そこでようやく、俺は意識を取り戻す。

「……………ここは？」

気がつくと、俺は見知らぬ石階段の上に立っていた。
見上げると、所々色の剥げた鳥居が立っている。

「……………博、霊？」

博霊神社。

はて、そんな神社が近所にあっただろうか。
それにこんなまったく知らない場所まで、俺は無意識に来たのだろうか。

「神社か……………」

何かに招かれるように、石段を一段登る。

現状を深く考えることすら億劫で、俺はただ階段を登った。

――我が刃を……………

再び意識が薄れる。

頭の中で、何かが這いずり回っている気がした。

しかし、気にする気すら起きず、もう一段階段を登る。

――我が刃を以て……………

頭に痛みが走った気がした。

同時に意識と視界が薄れる。

それでも刀を離さず、もう一段登った。

――我が刃を以て全て……………

頭に響くノイズが大きくなり、何も考えられなくなる。

それでももう一段、もう一段と、無意識にただただ登っていった。

薄れゆく意識の中で、何とか階段を登りきったと知覚した。

しかし、目の前には“壁”がある。

あまりにも壮大で、圧倒的で、強力な壁があった。

これでは、もう前に進めない。

――我が刃を以て全て斬り伏せよ

頭の中に“声”が響いた。
従うように、刀を構える。

そして、抜刀する勢いをそのままに、壁を斬りつけた。

ガラスの割れるような音がした。
それと同時に、俺は見たと思う。

“紅白の蝶が舞い、白黒の星が流れていく”。

そんな光景を、最後の最後に見た気がした。



「……………厄介なのが来たものね」

お祓い棒を片手にその少女、博霊 霊夢はそう呟いた。

「むしろ、厄介すぎて面白そうだぜ」

霊夢の横で箒に乗り宙に浮く少女、霧雨 魔理沙はそう言った。

そんな二人の少女の前には、一人の少年が刀を片手に倒れていた。

壱ノ太刀 ー最初からクライマックスー (前書き)

見切り発車で書き始め、ああこりやダメだと書き直し、早二ヶ月。
今度こそ、皆さんの良い暇つぶしに仕上げたいですね。

壱ノ太刀 ー最初からクライマックスー

夕方の博霊神社の境内にて。

「面白くも何ともないわよ。コイツ、自力で結界破りやがったのよ？」

「尚更面白いじゃないか」

「面白くないわよ。私の仕事が増えるじゃない。それに、」

溜め息をついて、霊夢は少年を睨みつける。

正確には、少年の持つ刀を。

「厄介な奴が厄介なモノ持ってやって来るなんて、何の嫌がらせよ？何なの、喧嘩売りに来てんの？」

「いいじゃないか。タダで売りに来てんだ。買うべきだぜ」

「いらないわよ。面倒くさい……………」

心底だるそうに霊夢は言い、その表情のまま鳥居の方へと目をやった。

「……………気味が悪いわね」

「？ 何が？」

「コイツは確かに結界を突き抜けてきたっていうのに、結界が破れた後どころか傷一つ無い……………」

「へえ、良かったじゃないか。結界が緩めることはできても、まだ自分で張り直す実力はないんだろ？」

「うるさい。それにそういう問題じゃないでしょ」

自分の力不足を指摘されてイラつきながらも、霊夢は顎に手を当

てて考える。

（外来人のクセに、破った結界を元に戻す能力でもあるのかしら？）
だとしたら、使えるかもしれないな、と悪どい笑みを浮かべながら、霊夢は背後の少年に目を向けた。

そこには、

「あら？もう起きたの？」

「……………」

少年が立ち上がっていた。

少年は霊夢の声に気づかないのか、ぼんやりと突っ立ったままにいる。

「おっ、ホントだ。起きてるじゃないか。オイお前、大丈夫か？」

「……………」

次いで少年が起きていることに気づいた魔理沙が彼に声をかけた。
だが、少年はただ突っ立ったまま、やはり何の反応も返さない。
それに少しむっとした魔理沙は、大きな声で同じ台詞を言いながら少年に詰め寄る。

その様子に呆れながら、霊夢は空を見上げた。

（一雨きそうだなあ……………）

綺麗な星を見せるはずの空は、生憎の曇天だ。

星はおろか月の光すら、かき消されているように感じられる。

霊夢は胸に引っかかるような鬱陶しい感覚に舌打ちしながら、視線を下ろした。

そして、

「っ！！」

突如走った悪寒に従うように、魔理沙の襟首を掴んで後ろへ飛んだ。

「ぐ、うえ……。な、何しやがんだよ、霊夢……」

手元で魔理沙が非難の声を上げる。

だが、それに耳をかさずに霊夢は睨みつけるように少年を凝視した。

カラン……。と乾いた音を立てて、少年の持つ刀の鞘が石畳の上に着く。

その瞬間、場の空気が変わった。

魔理沙が勢いよく立ち上がり、魔法で箒を手元に寄せる。

霊夢は札を、魔理沙はミニ八卦炉を懐から取り出した。

少年が引き寄せられるように、頭上を見上げる。

「……我が刃を以て全て斬り伏せよ」

唐突に少年がそう呟くと同時に、変化が起きる。

少年の持った刀から、ドス黒い靄のようなものが噴き出した。

それは不気味に蠢きながら、少年の身体へと巻き付いていく。

「……何だありゃ。魔力や霊力、神通力に法力、他にも何か色々混ざってるように感じるぜ？」

「…………元々、“封印に使われた力”のようね。無理矢理、“取り込んだ”のかしら？」

「分かるのか？」

「勘よ」

そんな会話の中、少年がゆっくりと霊夢達の方を向く。
彼の眼は、白眼と黒眼が反転してしまっていた。

「おいおい。ありや人のフリした妖怪じゃないのか？」

「いいえ。少なくとも、“あの人”は人間よ」

「勘か？」

「勘よ」

少年はただ無表情で、こちらを眺める。

そして、少年は表情を変えず、ゆっくりと刀を振り上げた。

「来るぜ、霊夢。どうする？」

「叩き潰すわ」

「そこなくっちゃな」

振り下ろされた刃をなぞるように、石畳を斬り裂きながら、黒い斬撃が飛来する。

それでも少女達は、その余裕をまるで崩さない。

「やれやれ、厄介なのが随分な厄介事を引き連れて来たものね」
「まあ、楽しそうな厄介事なら大歓迎だぜ」

そんな台詞を吐いて、少女達は迎撃を開始した。



「……………あ?」

俺、狭野^{サノ} 守彦^{カミヒコ}は真っ暗闇の中に立っていた。

とはいえ、見渡す限りの闇の中では、ちゃんと地に足をつけているかも怪しいけれど。

「……………ココ、どこだよ」

とりあえず頭に手をやって、記憶をなぞってみる。

だが、酷く曖昧な俺の記憶は、俺に確かな情報を与えてくれない。

(……………あの男を斬り殺して、石の階段を登って、壁にぶつかって……………?)

自分の記憶に混乱させられながら、それでも必死に考えてみる。
だが、

「……………夢か?」

考えた末に、そんな安直な仮定しか出せなかった自分がいる。
自分の馬鹿さが恨めしい。

そのまま結局、俺は何も分からないまま闇をただよっていた。
そんな時、

「残念じゃが、これは夢ではないぞ」

そんな言葉をかけられた。

振り向けば、白い布を纏い、刀を抱いた女性があぐらをかいていた。

長い黒髪に凜とした表情、主観的にも客観的にも美しい女性だと思う。

何となく脳裏に大和撫子という言葉が浮かびかけ、すぐに消えてしまった。

この人の発言の方に、思考が向いたからだ。

「夢じゃないって、どういうことだよ？ つか、アンタ誰？」

「“元” 神じゃよ。ここは儂が創りあげた“界” じゃ」

胸を張るようにして、女性はそう言う。

俺は女性の言葉をきっちり二秒間反芻した後、

「アンタ何言ってるの？」

これ以上ないぐらい人を馬鹿にするような笑みを浮かべて、そう言った。

だって、自称神（笑）である。

指を指して爆笑しても、差し支えない。

「ふむ。ここはお主の持つあの剣の内に形成された界であるが……
…、お主のその顔、信じておらぬな？」

「……………まあ、俺の夢がこんな厨二全開ってのは信じられないな」

おどけるようにそう返すと、女性はふむ、と顎に手を当てた。

「チュウニ…………、とやらはよく分からぬが、ここは夢では無いと言っ証明は、」

そこまで言って、女性は顎に当てていた手でこちらを指差し、

「コレでこと足りるじゃろう」

瞬間、女性の指から放たれた白い閃光が、俺を撃ち抜く。

遅れてやってきた轟音と、凄まじい衝撃を前にしてなお、俺は何が起きたか全く理解できなかった。

ただ、身体中に走る痺れと激痛が、吹き飛んでいく俺に、ここが夢では無いことを知らせてきていた。

仰向けに転がりながら、目を開く。

気を失っていたのか、それすら曖昧だった。

「あゝ…………あゝ」

とりあえず、息を吸おうとしたが、上手くできない。

思わず喉に手をやろうとしても、腕も動いてくれなかった。

そんな俺の横で、バチン！！ と、甲高い音が鳴る。

それと同時に、

「済まぬ。やりすぎたが、大丈夫か？」

白布を纏った女性が突然現れた。

俺は一瞬だけ目を丸くして、直ぐに女性を睨みつけた。

「そう睨むな。儂とて、久方振りに力を使ったのじゃ。少し加減を間違えるのも、仕方ないというものであろうよ」

「あゝ、ああ……………」

ふざけるな、と言ったつもりが、声にもならない。
内心で舌打ちしながら、とりあえず女性を睨んだ。

「じゃから、そう怒るでない。死んでおらぬだけ、マシであらうよ」
(死ななきゃ安いつてか、クソ野郎が)

「野郎では無い、儂は女じゃ」
(……………は?)

はて、今俺は声を出していただろうか。

「出さずとも伝わるよ。堕ちかけたお主を無理矢理こちらに引きずり込むのに比べれば、お主の心を読むぐらい容易い」
(……………、)

思わず、唾然とした。
神と言っていたのは、本当だったのではないかと思ってしまう。

「儂はもう神ではない。元神だと言ったじゃろう」

どうも、心が読めるのはマジらしい。
真実かどうかは別として、コイツの話は真面目に聞くべきかもしれない。

「ふむ。それがよかろ」

「……………」

見下すように言うコイツの態度は、何かムカつくけれど。

「簡潔に言えば、お主は人として死にかけとる」

「……………あ？」

いきなり突飛なことを言う女性に、思わず呆けた声が出た。
思ったより綺麗な声が出たので、もう喋れるのかもしれない。

「俺、死んだの？」

やっぱり、普通に喋れた。

丈夫な我が肉体に、少し感動する。

「言い方が悪かったかのう。そうじゃな、精神が潰れかけておると
いうのが正しいか」

「精神？」

精神的に死ぬ。

俺が廃人になるとでも言うのだろうか。

こんなに意識がしっかりとしていると言うのに。

「……………なんじゃ。お主、ここが現実じゃと思っておったのか？」

また心を読んだのか、女性が呆れた様子で問いかける。

確かに、そう言われるとそうだ。

こんなあたり一面真っ暗闇の不思議空間が、現実のハズもない。

「…………じゃあ、今の俺は幽体離脱でもしてんのか？」

「いや、今のお主は精神体が此処にいるだけじゃ。お主の肉体は、本能のままに動いておるよ」

「あ？」

俺の身体が、本能に任せて、勝手に動いてる？

イマイチ実感が沸かない。

果てして、何をやっているのだろうか。

「なあ。俺の身体は今、何をやってるんだ？」

「ふむ。目に映った少女二人に、襲いかかっておるな」

「…………う、うおおおおおおいっ!？」

何やってんの俺!？

思春期の男とはいえ、エロスが俺の本能か!？

いやいや、それでもそれはやっちゃ駄目だろ!？

「ふむ。何を勘違いしとるか知らんがな。お主の考えておるようなことはしとらんよ」

「おおおおお……………、お?」

痺れを無視して頭を抱えて悶絶していた俺に、鶴の一声がかかった。

しかし、襲っているのに襲ってないとは、どういう意味だろうか。

「ふむ。殺しにかかっている、と言えば通じるかのう」

「……………は?」

少し熱くなっていた頭から、一瞬で血の気が引いた。

不意に、家族の仇の死に様がフラッシュバックする。
俺が自ら望んで、またあんなことをするとでも言うのか。
「…………この剣の能力は、————程度能力じゃ」

突然、女性がポツリと語り出した。

「良かれと思い、宿した力じゃった。じゃが、正気のままこの剣を振るえたのは、大和を創りしあの男だけじゃったよ」

その表情には陰りがあり、どこか自慢気だった態度は、すっかりなりを潜めている。

「…………この剣の力は、人の本能と相性が悪い」
「どういう意味だ」

「この剣を握った者は、全てを殺し、蹂躪し、征服し尽くすまで止まらなくなる」

「…………おいおい。さすがに、」
「お主の父も、言っておったじゃろう？」

言われて、親父の言葉が脳裏をよぎる。

『この祠にあるのは、刀だ。みんなみんな殺してしまう、妖刀だ』

確かに、そう言っていた。

「…………じよ、冗談じゃ、」
「二万五千四百十二」
「？」

「三百年近く前に、この剣を握った者が殺した人の数じゃ」
「なっ…………」

嘘だと思いこもうとして、失敗した。
何故か、そう思えないからだ。

「……俺の身体が、勝手に人を殺すのか？」

「仇への最後の一太刀。アレはお主の意志で放ったモノじゃったか？」

「っ！！」

「そういうことじゃ」

そんな言葉が耳に入る頃には、頭の中が真っ白になっていた。

愕然としながら、それでも尋ねた。

「どうすれば良い？」

「さて、どうすれば良いのかのう？」

「……ふざけんな」

「ふざけているのは、どちらじゃ」

言われて、言葉に詰まる。

結局、何が悪かったのだろうか。

家族を殺した、あのクソ野郎か。

封印といって、祀られていたあの刀か。 あっさり殺されてしま

った、俺の家族か。

いや、違う。

「そうだな。俺の自業自得だ」

「そうじゃ。この剣を握ったのはお主。それ以外の誰でもない」

選択したのは俺だ。

俺がああ刀を取り出すと決めた。

それが原因ならば、全て俺の責任だ。

それでも、

「嫌なんだ」

「なんじゃと？」

「嫌なんだって言ったんだ」

「……殺すのがか？お主は仇を殺したではないか」

「違う」

きつと何がどうなったって、俺はああ男を殺しにいっただろう。

それを、俺は望んてた。

「でも、それ以外は斬りたくない」

「ほう」

「斬られたくないだろ、少女達だって。だったら、俺も斬ってたまるか」「勝手じゃな。流石は人斬り、言うことが違う」

「そうだよ。ここまで来たら、勝手を通させてもらう」

家族は死んだ。

仇は殺した。

もう何も無い。

何も無いなら、自分で考えるしかない。

自分で考えて、

「俺がそうなりたく無いなら、俺がそうならないように何とかするしかねえんだ」

俺が動くしかない。

俺が叫んだ後、女性は呆れたようにため息をついて、半眼でこちらを見つめた。

「お主、頭悪いじゃろう。言ってることが滅茶苦茶じゃ。自分の出来ることも、分かつとらん癖に」

「ぐ……………」

言われて、言葉に詰まる。

確かに、感情が先走って滅茶苦茶なことを言ってた気がするし、どうすれば良いのか分からなかった。

とはいえ、何とかしないといけない。

そう考えて、俺がぐぬぬ、と唸っていると、女性はもう一度ため息をついた。

「まあ、良からう。諦めておらぬのは、分かった」

「あん？」

「受け取るがいい」

女性がついと指を振る。

すると、目の前に一振りの刀が突き刺さった。

「うおっ。……………コレは、」

その刀は、俺が祠から取り出したあの刀だった。

「それはタダの剣じゃ。あの剣ほどの力はない」

「…………これで、どうしろと?」

「叩き斬れば良からう」

「…………何を?」

「ここを出れば分かる。斬れたならば、お主の勝ちじゃ。斬られたならば、…………分かるな?」

何となく予想はつくが、コイツは抽象的な話しかできないのだからか。

神とやらの特徴なのだろうか。

というか、俺が諦めていたら、コイツは俺をどうしていたのだから。

「叩き出しておったよ。元より、その確認の為に連れてきたのじゃ。あと神では無い。元神じゃ。何度言えば分かる」

また読まれた。

何かドキッとするからやめて欲しい。

「さて、あとは出口かのう」

そう言って、女性は再び指をついと振るう。

すると、闇が裂けてそこから光が漏れ始めた。

あれが出口なのだろう。

刀を抜き、出口を見据える。

そんな俺に、女性が背後から声をかけた。

「お主に言うておくことが二つある」

「？」

「まず一つ、お主が襲いかかった少女二人、まだ死んでおらん」
「っ。それは、良かった」

あんまり思い出したくないことを言われ、顔をしかめて返答する。
今は生きていても、それは今だけだ。

さすがに少女二人相手に、自分の身体は遅れを取ったり、

「うむ。お主、運が良かったのう。今のところ、お主が劣勢じゃ」
「……………は？」

「彼女等、随分と強い。これならしばらくは持つじやろう。しかし、
急げよ。時間は無限ではないのだからな」

何か負けてるらしい。

御大層な刀を携えたくせに、たかが少女二人に負けてるらしい。
何だか複雑である。

「もう一つ、お主の父の最期の言葉を伝えようかと思つてのう」
「……………え？」

「散々お前に謝った後に言った言葉じゃ。聞くかの？」

「……………何て言つてた？」

「『前を見て生きろ、守彦』だそうじゃ」

「……………、」

なるほど。

それは、あの親父らしい一言だと思った。

光の漏れ出す裂け目の前に立ち、口を開く。

「何だかんだで世話になった。ありがとう」

「こちらも好きでやっておる。礼は要らん」

刀の柄を握りしめる。

不思議と、しっくり来た。

「最後に一つ、アンタの名前は？」

「カシマ鹿島 御都、御都と呼ぶが良いよ」

「……そうかい。狭野 守彦だ。よろしく御都」

「ああ、よろしく守彦。また会えると良いな」

視界が真っ白に染まる。

直後、俺の意識は分断された。

気がつけば、我が家の庭に立っていた。

ふと、今までの全部夢だったんじゃないかと期待がよぎる。

しかし、人の気配の無い我が家と左手に持った刀が、その期待を叩き潰した。ふと、前を見ると、いつの間にか誰かが立っていた。その誰かは黒い靄のようなものを纏っており、顔がよく見えない。しかし、

「――我が刃を以て全て斬り伏せよ」

その声と、カチャリと構えられる刀の音で全て諒解した。

よくよく周りを見れば、家の外は御都のいた空間同様、やはり異様な闇に包まれている。

それで確信を得て、やけくそ気味に力強く笑い、鞘から刃を抜き放つ。

「なるほどなるほど。自分自身の精神世界で、自分の悪い心を斬れ、と。まったく、笑えないな」

そう自嘲気味に笑いながら、俺は“自分自身”へと駆け出した。向こうが刀を振り上げ、こちらが刀を振りかぶる。

直後、怒声と金属音が庭に響き渡った。



「やはり、似ておるのう」

光の中に消えた少年を思い出しながら、御都はふと漏らす。彼女の脳裏には、嘗て自ら創り上げし剣を授けた男の姿があった。

鹿島は一步前に進もうとして、痛みに顔をしかめる。

守彦は気づけなかったが、彼女の身体には幾重にも闇が絡みつき、更に無数の闇が身体中を貫いていた。

「……………我ながら、大失策じゃったな。悔やまれるのう」

そう言うってから、ふと守彦の父親の最期の言葉を思い出した。その言葉を思い、思わず笑みを零す。

「よもや、人の言葉が身に染みるとはな」

くつくつと自嘲気味に笑い、閉じていく光を眺めた。

「まあ成るようにならぬじやろう。のう、——」

そう言って、クスリと笑う。

そんな表情のまま、御都は眼をゆっくりと閉じた。



箒の上に立った魔理沙が、ミニ八卦炉を構える。

その先には、黒い靄を纏い刀を携えた少年が立っていた。

「いくぜ……………!!」

ミニ八卦炉を起点に魔法陣が展開され、魔力が注ぎ込まれる。手加減が不要なのは、ここまでのやり取りで分かっていた。

ならば、

「マスタースパーク!!」

彼女は全力で撃つだけだ。

放たれたのは、莫大な光の奔流。

それは容赦なく、一瞬で少年を飲み込んだ。

「へっ。どうだ!？」

魔理沙が勝ち誇ったようにそう尋ねる。

しかし、少年からの返答は返ってこない。

“返答は”。

「っ!？」

突然両手にかかった重圧に、魔理沙は顔をしかめる。

目を凝らしてみれば、その重圧の正体はすぐに分かった。

「…………野郎っ!!」

彼女のソレとは対象的な黒色の奔流が、彼女のソレを押し返してきていた。

その出元には、あの少年がいる。

彼は虚空に出現させた陣を貫くように、刀の切っ先を魔理沙に向けていた。

そこから、黒い靄の奔流を作り上げているらしい。

「う、お、おおおおオオオオオッ!!」

吼え、更に魔力を注ぎ込む。

パワーが自慢の彼女が、押し負けることを許すハズがない。
光の奔流が黒の奔流と拮抗する。

一点に集中した力は膨張し、

「……………っ！！やばっ！！」

「……………、」

炸裂した。

爆発が、辺り一面を支配する。

音も光も匂いすら、爆発が吹き飛ばした。

それでも少年は眉一つ動かさず、まるで動じない。

そんな彼の背後に、

「隙だらけね」

紅白の巫女がスッと現れた。

彼女は手に持ったお祓い棒を振りかぶり、少年の首に向けて一閃する。

だが、その攻撃は、少年が一瞬で盾にするように構えた刀に防がれていた。

「……………、」

少年が身体を捻るようにして、刀に力を込める。

タダでさえ、人の男と女だ。

単純な腕力勝負で、軍配がどちらに上がるかは目に見えている。

案の定、刀は容易く振り切られ、

「やっぱり、隙だらけね」

霊夢はそれを飛びながら受け流し、少年の頭上を取った。
そのまま、空いている左手に霊力を込める。

単純な霊撃だが、人一人容易く叩き潰せる技だ。

霊夢は左手を引き絞り、少年の頭に標準を合わせる。

「……………、」

対して少年は刀を片手に持ち替え、身体を半身ずらす。
しかし、その動きだけで、霊夢の攻撃はかわせない。
ならば。

「……………、」

少年の空き手に、黒い靄が収束する。

ギョロリ、と光の無い眼が霊夢を捉えた。

直後、二人の掌底が激突する。

似通ったお互いの技は一瞬だけ拮抗し、お互いを勢い良く弾き飛ばした。

「っ」

空中で錐揉み回転しながらも、霊夢は数枚の御札を取り出し放った。

適当に投げられたように見えたソレは、引き寄せられるように少年へと迫る。対して、石畳を転がる少年はソレを視界に納めると、瞬時に空いている手で喰らいつくように石畳を掴んだ。

爪が割れ、指先から血が出るが、少年は手を離さず、無理矢理に動きを止めた。

そのまま地に足をつけると同時に刀を振り、迫る御札を一太刀で薙ぎ払った。

そのまま姿勢を変え、更に一振り。

当然刀は空を斬るが、“斬撃は空を斬り”、裂きながら霊夢へと飛ぶ。

対する霊夢は、丁度空中で姿勢を持ち直したところだった。

「ちっ」

黒の色と形を得、脅威と成したソレが霊夢の視界に入る。彼女は舌打ちし、

(……………結界を張るには、遅い)

そう判断し、霊夢は両腕を顔でクロスした。かくして、窮地に陥った巫女を、

「よっ、と」

「ぐえっ」

魔法使いがかっさらっていった。

「ふうっ。危ないところだったな！」

ニカツ、と笑い、魔理沙は快活に脇に抱えた霊夢に声をかける。
対して、霊夢は眉間に皺を寄せ、忌々しげに魔理沙を睨みつけた。

「息が詰まるから、もう少し優しく助けなさいよ。御幣も落として来ちゃったじゃない」

「おいおい、命の恩人に非道い言い草だな」

「別にそこまでピンチじゃなかったわ」

そう言っ、て、霊夢は両手の指一杯に挟んだ御札を見せつける。
どうやら、それで斬撃を相殺するつもりだったようだ。

「はっはっは。そりゃスマンかった」

それを見て、魔理沙は笑顔のまま謝る。

反省の様子が見えない魔理沙にため息をついて、霊夢は彼女から離れた。

少し高い場所から境内を見れば、相変わらずの無表情で少年がこちらを見上げている。

「やれやれ。あの野郎、人の技を盗みやがって」

「その台詞、アンタが言うか」

「私は学んでるだけだぜ。あんなモロパクリと一緒にするな」

ムッと頬を膨らます魔理沙から目を離し、少年へ視線を戻す。
少年はこちらを見上げたまま微動だにしないが、

(……………、)

霊夢は何か、嫌な予感を感じた。

「まあ、あの野郎の火力は中々だが、空が飛べる私とあの野郎じゃ機動力が違うぜ」

不意にニヤリと笑い、魔理沙がそんなことを言う。
その言葉で、霊夢は確信した。

「……………来るわよ」
「あ？」

霊夢のその一言と同時、少年に変化が起きる。
彼の背中から、突然翼のようなものが生えた。
まるで鳥の翼の骨格のようなそれは、あの黒い靄で形成されている。

「……………、」

少年は無言で地を蹴り、彼の身体がふわりと浮く。
それに合わせるように翼が羽ばたき、猛スピードで空へと飛び上がった。

「さて確か、機動力はアンタのが上なんですよ？叩き落とすなてきなさいよ」

「おいおいまったく……………、言われなくともそうするぜ！！」

魔理沙は箒の上に、サーファーのように立つとミニ八卦炉を箒の先に装着する。

瞬間、ロケット噴射口が火を噴くように、閃光が吹き出した。

「うおおおおおっ！！」

雄叫びを上げ、超速で降下する。
その様はまさしく流星の如く、向かい来る少年へと降り注いでいった。

対して、少年は突き出すように刀を構える。
瞬間、目の前に幾つもの“陣”が形成された。

「……………ぐ、が」

同時に、少年の口から声が出た。
陣を突き破る毎に速度を増し、少年は更に翔昇っていく。
そして、その表情には険しさがあり、

「ガアアアアアアアアアアアッ!!」

獣のような咆哮を上げて登る姿に、先ほどの無表情の少年の面影は無くなっていた。



「がぁぁぁぁぁあっ!!」

気迫は十二分。

確かに隙をついたつもりで放ったそれは、

「……………」

またもや、容易く弾かれてしまう。

隙ができた俺に対し、相手が刀を振り上げた。

「っ!!」

とっさに横に飛ぶ。

次の瞬間、振り下ろされた刃は、

——ドゴオオオオオッ!!

冗談みたいな轟音を上げて、砂利の敷かれた庭の地面を切り裂いた。

本当に、冗談じゃない。

「……………くっそお!!」

凄むように吐き捨てながらも、逃げるように距離を取る。

しょうがない。

あんなの喰らったら間違いなく死ぬ。

（そういえば、ここで死んだら完全にアレに乗っ取られるんだろうか）

そう思いながら、目の前の自分の本能とやらを睨みつける。

姿形こそ全く一緒だが、本当にそれだけだ。

あんな顔ができるのかと言うほどの無表情だし、身体全体に黒い

靄を纏い、斬撃を飛ばしたりしてくる。

うん。

アレは、俺じゃない。

俺の形をした、化け物だ。

先ほども、黒い靄が形を変えて何か翼みたいな何かを作り上げてたし。

（飛んだりしたら、詰みだな）

今のところは飛ばず、地に足をつけて打ち合ってくれている。
変に律儀なのは、流石は俺の本能だと思っておく。

「……………」

そんなことを考えていると、奴は無言で斬撃を飛ばしてきた。
最初こそ、目玉が飛び出るかと思うほど驚いたが、もう驚かない。
驚かないが、

「ふざけんなっ!!」

悪態は何度でも口から出てしまう。

だって、斬撃が飛ぶのだ。

漫画かよ、ゲームかよ、と。

こっちの刀は振ったって、風切り音しか出ない。

実に不公平である。

それでも、斬撃をギリギリで避けて、反撃の為に俺は地面を蹴り上げた。

ホントは全部夢だったら良いと思ってる。

目が覚めたらいつも通りで、朝飯を食べながら、変な夢を見た妹にでも話す。

だが、手に持った刀が、それは有り得ないと訴える。

あの男を斬り殺した時の感触を、思い出させてくる。嫌になる。

心底、死にたくなる。

全部が全部、投げ捨てたくなる。

しかし、しかしだ。

「うおおおおおおっ!!」

それでも今の俺は、この現状を生きることに必死になれた。

今は、家族皆殺しの件や仇への復讐の件を、頭の隅へ追いやれている。

きっと、後で死ぬほど悩むことになるのは分かった。

それでも、

『前を向いて生きろ、守彦』

まずは、目の前の問題から。

理不尽だろうが、超常的だろうが、幻想的だろうが。

仮に、これが夢だったとしても。

目を背けたり、逃げたりはしたくなかった。

間合いに入り、刀を振り上げる。

化け物は、こちらに白黒反転した眼を向けて刀を構えた。

俺が振り下ろす刀を、化け物が振り上げられた刀が弾く。

体勢的に有利なのは此方なのに、何故か俺が押し負けた。
無論、流石は化け物かと思っている暇は無い。

「ッ……………!!」

拙い。

両腕を上げてしまい、無防備に胴をさらす。

この隙は、デカすぎる。

親父との稽古なら、間髪置かずに怒号と木刀による突きが飛ぶだろうが、今は、

「……………、」

無言で、黒い靄を纏った真剣による突きが放たれた。

「ぐっ、ぱっ!？」

口から血が溢れる。

生まれて初めての吐血だ。

できれば、一生体験したくなかった。

口全体で鉄のような味を噛み締めながら、ついでに歯も食いしぱる。

正直、意識が飛びそうだからだ。

「く、こお、の……………」

至近距離にいる化け物にせめて一太刀喰らわせようと、刀を振りかぶる。

しかし、脇腹に突き刺さった化け物の刀のせいか、刀を掴んで
る手の震えが止まらなかった。

これでは、刃が刺さりこそすれ、斬れるハズがない。

思わず舌打ちした直後、衝撃に腹の真ん中を打ち抜かれた。

同時に、脇腹に激痛が走る。

「ぐ、がああっ………!？」

蹴られ、刀を乱暴に抜かれたとすぐに理解した。

理解していながら、地面に倒れることを回避できない。

仰向けに倒れ、衝撃と激痛に負けて意識が遠くなる。

そして、何故か遠くなる化け物の足音に疑問を持ちながらも、

(ちく、しょ………)

意識と刀を手放してしまった。

「………暗い」

あまりにも暗い。

御都のいた闇だって、自分の姿は見えたというのに。

唯一見えるのは、

「………光？」

弱々しい光のような何か。

今にも消えてしまいそうなソレは、それでも自分の存在を必死に訴えているように思えた。

(……………何なんだ?)

そう思って、手を伸ばす。

自分の手は全く見えないが、

「……………ぐ、う」

確かに、触れることが出来た気がした。

触れたと思った途端、ソレは異常な程に輝き始め……………、

「……………ぐ、う」

鋭い痛みに呻きながら、目を開く。

真っ暗な空が見えた。

そんな空から目を背けるように寝返りをうち、右腕を伸ばして刀を握り直す。

「うぎ、ぎぎ……………」

左手で地面を押し、片膝を立てる。

刀を地面に突き刺し、縋るように身体を持ち上げる。

「ぐ、ぶっ、……………はぁ、はぁ」

口から血が溢れるが、何とか立ち上がることはできた。

目線を上げて、まず視界に入ったのは、虚空に浮かぶ魔法陣。

何か、漢字だか象形文字だかが、円を基調とした陣形の中に規則正しく並んでいる。

あれは魔法だろうか、それとも漢字だから陰陽道とか何だろうか。分からない、分かるハズもない。分からないなら、どうでもいい。

「……………オラ、来いよ」

そう言ってみると、魔法陣の向こうにいた化け物が刀で魔法陣を貫いた。

瞬間、黒い奔流が魔法陣から溢れ出した。

大瀑布のようなそれは、圧倒的な威圧を持ってこちらへ迫る。

正直、滅茶苦茶怖い。

アレを喰らえば、俺は欠片も残らず消えると思う。

それでも恐怖を押し殺して目を瞑り、両手を前に翳した。

「…………………………、」

目を瞑れば、当然真っ暗闇だ。

だが、その中に“あの”光が見える。

光は輝き闇を払い、俺の世界を埋め尽くした。

そして、覚醒する。

目を開けば、視界を再び闇が埋め尽くしていた。

それは、紛うことなくあの奔流だ。

一秒待たずに、それは俺の両手に触れ、

「うおおおおおおおおおっ!!」

消し飛んだ。

魔法陣にヒビが入り、溶けるように消えていく。

凄まじい傷痕を挟んで、俺と化け物は呆然と立ち尽くす。

『他の能力を抑え込む程度の能力』

頭にそんな言葉が浮かび上がって、俺は呼吸するかのように容易くその力を使用した。

使ってから、思うのもアレだが、

「……………何コレ」

何だか、こっちまで化け物みたいになってしまった気がする。

ちよっと自分の身体を見回すが、黒い靄に覆われてたりはしない。脇腹から血は出てるけど。

「うっ」

自分の傷を確認すると、思い出したように意識が飛びそうになる。そんな中、

「っ」

小さく息を吐き出すような音を聞いた。

朧気な視界に、飛びかかってきた化け物の姿が映る。

馬鹿みたいな脚力で、10数メートルをひとつ飛びに来たらしい。

「……………化け物め」

忌々しげに口を尖らせながら、右の掌を化け物に向ける。

漠然とした自信が湧いた。

今ならば、やれる。

（……………抑え込め！！）

そう、念じるように力を込めれば、

「!？」

化け物を覆う、黒い靄が消し飛んだ。

「っ!？、!？、!？」

ココに来てようやく、化け物が焦りを見せた。

飛んできた勢いは嘘のように消え、無様に隙をさらして地に落ちる。

「ハッ。俺の顔でアホ面晒しやがって」

歯を食いしばり、眼を見開く。

痛みを無視して勢いよく踏み込み、刀を握る手に力を込めた。
振りかぶり、意識を高める。

「お前はあっ！！」

横薙ぎに一太刀。

しかし、すんでのところで化け物に刀で防がれる。
当たり前だ。

今のは俺でも防げる。
だから、

「俺の中から、」

本命は、化け物の刀を弾いた後のこの一太刀。
刃を返し、更に踏み込む。
そして、

「消えろおおおおおっ！！」

渾身の一太刀が、化け物を切り裂いた。

地面へ落ちると同時に化け物が倒れ、それを見届けてから俺も膝を着く。

「はぁ、はぁ……………」

勝った。

完全勝利である。

これで暴れているという俺も、眼が覚めることだろう。

「はっ、はは……………」

思わず笑みが零れ、

――殺す

その声を聞いて、表情が固まった。

今のは俺の声だったが、俺の口から出たものではない。

「……………嘘だろ？」

化け物に目を向ける。

動きは無く、斬りつけた腹から血が溢れてるだけだ。

医者や検死官でもないが、致命傷なのは何となく分かる。
なのに、

「……………殺す」

声は間違い無く、化け物から発せられていた。

化け物の手元にある刀から湧き出るように、再び黒い靄が現れる。

黒い靄は化け物の血に触れ、その色を赤黒く変色させた。化け

物と混ざった赤黒い靄は、化け物の腕と握られた刀に絡みつく。

「……………ゼンブ殺す」

ムクリと立ち上がる化け物に、先程までの無表情は無い。

眉間の皺や剥き出しの犬歯からは、憤怒の感情が読み取れた。

「……ミンナ殺す！！」

怒号と共に赤黒い靄を纏った刃が振るわれる。それは、冗談染みた破壊を生み出した。

「……マジかよ」

世界が、崩壊していく。

目の前で地面が捲り上がり、消滅していく。

その先には、化け物が生み出した赤黒い壁があった。

「！！」

両手を前に翳し、全力で念じた。

しかし、何事の無いかのように、壁は瞬く間にこちらに迫る。

「ちく、しょう……！！」

抵抗虚しく、俺の意識は一瞬で消し飛ばされた。



ふわふわと浮く箒に腰掛け、魔法使いは懐から葉を取り出す。

「はっはっは。良い顔するようになったと思ったら、いきなり攻め

まくりやがって、この野郎」

そう言う魔理沙の姿は、無数の切り傷によって痛々しいものに変わっていた。

ぱっくり割れた額に止血用の薬を塗りながら、視線を動かす。

あの少年は魔理沙の視界の中には、いない。

彼は、

「ガアアアアアアアアアアッ!!」

まるでそこに出現したかのように、魔理沙の背後に現れた。

「やっぱり、私は今のお前の方が好きだぜ。無表情無感情の奴と闘り合ったって、つまらないからな」

魔理沙は背後に現れた少年に気づきながらも、ニヤリと笑うだけで振り向こうともしない。

対して、少年は黒い靄をこれでもかという程に絡ませた刀を振りかぶる。

「だが、」

最早、異形の黒き大剣と化しているソレを視界の端に納めながら、魔理沙は少しだけ前に進む。

まだそこは射程圏だ。

しかし、魔理沙はそれ以上の回避行動を取らない。

何故なら、

「注意散漫は頂けないな」

必要無いからだ。

「神技」

少年の上方。

そこに巫女がいた。

「八方」

彼女の言霊に応えるように、正八角形の結界が少年を取り囲む。遅れて少年が刀を振るうが、結界は微塵も揺るがない。

当然、結界の外の魔理沙に刃が届くことはない。そして、

「鬼縛陣」

神々しい程に真っ白な光が、少年へ降り注いだ。

「ぐ、ぎ……………!!」

少年は境内の石畳の上に立っていた。

無論、自分で降りた訳ではなく、あの攻撃で墮とされたのだ。消えそうな翼に、打撲や火傷のような無数の傷。

満身創痍の身体で、それでも殺意に表情を歪ませて前を向く。その視線の先に、

「よう」

黒白の魔女が降りた。

「ぎ、ぎ、ぎ………!!」

少年はすぐさま刀を引き絞り、正面に陣を出現させる。

それは、魔理沙の砲撃を押し返して見せた、あの技だった。

「いいね。丁度いい」

それを見た魔理沙は、ニヤリと笑い。

一瞬でミニ八卦炉を正面に構えた。

「恋の魔法使いの名にかけて、パワーで負ける訳にはいかないんだ」

全力で魔力を注ぎ込み、全力をかけて魔法陣を展開する。

「悪いが、本気でいくぜ………!!」

楽しげに笑う魔理沙に向けるように、少年は鬼の形相で突きを放つ。

刃が陣を貫き、そこから黒い奔流が溢れ出した。

それを見た魔理沙は表情を一変させ、吼える。

「ファイナルスパーク!!」

同時に、極大の閃光が放たれる。

直後、黒と白はぶつかり合う。

そして、

「!?!」

一秒もかからずに、勝敗がついた。

半壊した鳥居の下で、少年は力無く倒れている。

遙か彼方まで吹き飛ばされても、驚かないような一撃だったが、そこは最後の抵抗をして見せたのだろう。

「はあはあ………ハッ！」

その様子を見た魔理沙がグッと拳を握り、ニッと笑う。

「勝ったぜ」

「勝ったぜじゃないわよ。手加減無しにぶっ放しちゃって、あの人生きてるの?」

勝利の余韻に浸る魔理沙の隣に降りて、霊夢は怪訝な顔で訪ねる。
魔理沙は気分を害したと言わんばかりに口を尖らせた。

「何だよ。霊夢だって本気でぶっ放してたろ?」

「あれぐらいじゃ死なないと思ったのよ」

「私もそう思ったんだぜ」

すぐに調子を取り戻した魔理沙に、霊夢は呆れてヤレヤレと首を振る。

そのまま視線を動かして、

「っ」

思わず、目を丸くして絶句した。

「しかし、激戦だったぜ。こんなのは、吸血鬼が調子乗って、幻想郷征服しようとしたあの異変以来だな」

そう言いながら霊夢に向き直り、彼女の様子に首を傾げながらその視線を追う。

その結果、

「…………マジかよ」

彼女は唾然とした。

少年は立っていた。

赤黒い靄を両腕にと刀に纏わせ、立っていた。

空気が変わる。

単純な力の圧だけで、空間が支配された。

「……………!!」

その圧に二人が息を呑む。

魔界を荒らされ激昂した魔界神が現れた時も。

異世界から来たという科学者と闘った時も。

夢幻世界に潜んでいた最凶の妖怪を相手にした時も。

人類抹殺を目論む悪霊と対峙した時も。

不敵に笑ってみせた彼女達から、笑みが消える。
純然な、それでいてただただ莫大な力の塊。
そんな単純なものに、彼女達は恐怖を覚えた。

「ぐ、く………」

少年が歯を食いしばりながら、顔を上げる。

少女達は額に冷や汗を浮かべながら、動くことすらできない。
そして、そんな彼女達に少年は、

「どうした？そんなところで縮こまって。こっちももう一歩で終わりそうなんだ。もう少し、もう少しだけ、もっと景気良く空を飛んで、俺に魅せてみろよ」

彼本来の表情で、そう笑いかけた。

少女達が啞然とした一瞬の後には、少年の双眸の色は反転し、表情は敵意一色に染まる。

だが、

「はっ。はははははははっ！！」

「ぷっ。あははははははっ！！」

もう遅い。

彼女達は既に、何時も通りの、余裕の笑みを浮かべていた。
そこに、数秒前にあった恐怖の色は欠片も残っていない。

「ふう……。こんな新参者に、随分とナメられたものね」

「まったくだ。だが、やっぱりコイツ面白いぜ」

「ええ。今回ばかりは、アンタの勘が正しかったようね」

巫女は地を蹴り、魔法使いは箒に跨り、宙に舞う。
優雅に、美しく、そして楽しそうに。

「……………」

その様子を視界に納めながら、それでも少年は敵意を欠片も消さず
に刀を天に翳す。

「神武東征」

宣言し、刀が応え、宇宙^{セカイ}が脈動する。

「武神ノ一刃!!!」

少年から放たれたのは、幻想を蹂躪せんとする破壊の斬撃。

それが正面に迫ってなお、幻想に生きる少女達は楽しそうに笑う。

少年の、刀の、狂気染みた殺意を、化け物染みた力を。

真正面から、受けて立つ。

「さあ、本気の本気だぜ」

「望み通り、飛んであげるわ」

幻想を舞う、白黒の流星と紅白の蝶は、

「ファイナルマスタースパーク!!」

「霊符、夢想封印!!」

決して堕ちない。



「……………綺麗だな」

仰向けに倒れながら見上げた遙か彼方で、紅白の蝶と白黒の流星が舞っている。

望外だ。

幻覚か夢かは分からないが、挑発をかましといて良かったと思う。

「さて」

“彼女達”は、舞ってくれている。

ならば、俺も立ち上がらなくてはならない。

身体中の痛みはもう限界を超えて飛んでしまっている。

好都合だ。

まだ使えるものは全部使って、身体を持ち上げる。

「ぐ、ぶ……………!!」

口から血が溢れ出し、身体全体が軋む。

しかし、それらを全部無視して、二本の足で立ち、あの刀を握りこむ。

「よう」

力強く笑いかける。

崩壊し、闇に包まれた空間の中で、化け物は正面に立っていた。相変わらず、その表情は敵意一色で、刀と両腕に赤黒い靄がかかっている。

「……………殺す」

「何で？」

思わず、聞いてみた。

聞かなきゃいけない気がしたからだ。

「ゼンブ殺せば、もう“あんなこと”は起きない」

「……………、」

なるほど。

俺の本能というだけあって馬鹿だ。

妖刀の力に吞まれてるにしても、あまりにも馬鹿過ぎる回答だ。だが、それを考えたのも、他ならぬ自分な訳だ。だからこそ、

「分かった。やっぱ、お前は消えろ」

「……………、」

そんな後ろ向きな回答は要らない。上を見上げる、そこには美しく舞う存在があった。

「俺は独りになっても、もっとアレを見ていたいんだ。殺させる訳にはいかねえよ」

さすがは俺だ。

回答の馬鹿さ加減が、本能と差が無い。

でも、それでも、そっちの方が前向きな回答だと思うから、

「悪いが、斬るぜ」

刀を構える。

無意識に発動していた能力を、意識的に遮断する。
同時に、手に握った刀から、力が溢れるのを感じた。

（あの女……………）

普通の剣じゃなかったのかよと、刀にジト目を向ける。

——可愛い女子の嘘じゃ。男子は、笑って許すものじゃろう？

そんな声が聞こえた気がして、思わず吹き出してしまう。

「いやいや、歳を考えろよ」

直後、凄まじい怒声が聞こえた気がした。

「……………、」

そんな中、化け物の刀と同じように、俺の持つ刀から黒い靄が噴き出す。

一瞬で呑み込まれ、意識の底から黒いものが溢れ出すのを感じる。

――一機会は一度きりじゃ。逃すなよ。

目を閉じ、意識を沈める。

探すのは、手に持つ刀の“本質”。

そして、

「……………そうか」

あっさりと見つけることができた。

「フツノミタマ
布都御魂」

名を呼ぶ。

刀が、応える。

黒い靄が、霧が晴れるように消え去り、代わりに深い蒼色の衣が現れる。

そして、この刀に与えられた能力を知った。

『ありとあらゆる邪を祓う程度の能力』

目を開く。

正面には、赤黒き靄を纏った化け物がいる。

「さあ、決着をつけるか」

踏み出した足音が重なった。

「「神武東征!!」」

吐き出す言霊に呼応し、力が拡大する。

闇に、紅と蒼の色がついた。

莫大な力の圧を感じながら、速度は落とさない。
チャンス
機会は一瞬。

そして、その一瞬で決着はつく。

お互いがお互いの間合いに入る。

「武神ノ一刃!!」

化け物が放ったのは、単純な力による一撃。

それは単純だが、刀の力を極限まで引き出した、最強の一撃だった。

その一撃を超えるのは、至極困難だ。

だが、負けない。
負ける訳にはいかない。

「幻想ノ一刃!!」

放ったのは、全力の一撃。

刀ではなく、俺自身の力を振り絞った、全身全霊の一撃だった。
そして、互いが刃を振り抜き、交差する。

深い蒼色の衣が溶けるように消え、俺は刀を取り落とす。
そして、刀は地に落ち、

同時に、背後で化け物が倒れた。

合わせるように、化け物の刀が砕け散る音が響く。
勝ったのは、俺だった。

闇に突き刺さった刀の切っ先から、世界にヒビが入る。
それは瞬く間に広がり、世界を覆い尽くした。
振り返ると、もうそこに化け物はいない。
視線を変え、手のひらを見る。

「……………」

自分の本能的なところが、不安を訴えてるような気がした。
それを感じて、笑ってしまう。

「大丈夫だ」

拳を握る。

「覚悟はした。だから、俺は前を向いて生きていける」

自分に言い聞かせるようにそう言う。

不安は、無くなった。

直後、視界が白に染まる。



「抑えきったか」

御都は目を開き、ニヤリと笑う。

「あの小僧。なかなかどうして、やりおるのう。久方振りに少し疼いたわ」

更に笑みを深くし、ほんの少しだけ“動こう”として、断念する。
御都は忌々しげに、己を戒める闇を睨みつけた。

「……………これも小僧の力で解けぬものか」

そう自分で言って、御都は否定するように首を振る。
少なくとも、今の小僧には無理だろう、と。

「何せ、あの男の力じゃからな」

脳裏に浮かぶのは、かつてこの剣を唯一振るえた、あの男。
そして、“御都が剣を与えた男”の姿だった。

「まあ、何はともあれ、暫くは楽しく過ごせそうじゃ」

そう言って、御都は再び笑う。

「初の武勲に賞賛の念ぐらいは、送っても良いかのう」

そう言って、穏やかな笑顔のまま、御都は目を閉じた。



「なあ、やっぱ死んじゃったかな？」

「かもね。アンタが調子乗って、勝敗着いてんのにブレイジングスターなんかぶっ放すからよ」

「な、何だよ！！霊夢だって、明らかに力尽きたコイツに夢想天生ぶっ放してたろ！？」

「アレは……、そ、そう！ トドメの一撃よ」

「……それ、自分が殺ったって認めてるぜ？」

「ぐ……。い、いいのよ。一人なら大量殺人者じゃないわ」

「うわぁ……」

「何ヒイてんのよ。アンタだって共犯なんだからね」

「いや、私は偶々殺人現場に居合わせただけの、普通の魔法使いだぜ」

「……あゝー？」

凄く騒がしい。

何か、頭上が凄く騒がしい。

気になるが、瞼を開くのは億劫だ。

とはいえ、開けなきゃ状況が分からない。

「う、ぐ……」

「お？」

「あら？」

まず視界に入ったのは、黒。

またあの闇しがない空間かよ、と思ったが、

（あ、星）

輝く星を見る限り、これは夜空らしい。

どうやら、目が覚めたようだ。

「ん……」

何だか長い夢を見ていた気分になるが、右手に握られた刀が全部現実だったと教えてくれた。

「ほらな！やっぱり生きてたぜ」

「見りゃ分かるわよ」

「あん？」

仰向けのまま、視界を声がした下に向ける。

そこには、ボロボロの少女達がいた。

「お前ら、誰？」

そう言ってから、彼女達に誰か、そして俺が何をしたかを思い出す。

まず、謝るべきだったと後悔しながら、少女達の顔を見る。

少女達は一瞬、呆気にとられた顔をしたが、すぐに合点のいったような顔をした。

「おっと、そういえば名乗ってなかったな。私は霧雨 魔理沙。普通の魔法使いだ」

「私は博麗 霊夢。この博麗神社の巫女よ。で、アンタは？」

あっさり名乗る彼女達に、思わず目を丸くした。

俺が彼女達に何をしたのか、何となくだが覚えている。

だから、彼女達の何事も無かったかのような態度が信じられなかった。

「ねえ、聞いてる？名前聞いてるんだけど」

「え？ああ、狹野。狹野 守彦だ」

「守彦さんね……。まあ、まずは、」

霊夢は笑顔を作り、手を伸ばす。

「幻想郷へようこそ」

その笑顔を見ていると、何だか申し訳無さすら馬鹿らしくなってしまった。

痛む身体に鞭を打って、巫女の小さな手を掴む。

「世話になります」

そう言って、笑った。

随分久しぶりに、心から笑えた気がした。

そんなこんなで、俺の人生があらゆる意味でリスタートしたのだが、

「で、幻想郷って何？」

「は？」

「え？」

「……………え？」

面倒事は終わってなかったり、むしろ始まったばかりだということ、頭の悪い俺は全く気づいていなかった。

壱ノ太刀 ー最初からクライマックスー（後書き）

『いやいや、歳を考えろよ』

ふとそんな言葉を思い出し、御都は目を開く。
両手で顔や身体をペタペタと触り、はあとため息をつく。

「老け込んだり、しとらんよな………」

御都のいる世界に鏡は、無かったりする。

上手く入れられず、カットした一部。

何か気になる他人の一言って、あるよね。

どうも。

初めまして、エッジです。

こんな駄文に目を通してくれて、ありがとうございました。
さて、超展開に超展開を重ねた一話が終了。
ちなみに、主人公の全盛期も終了です。

天上天下を征かせる気は、毛頭ありません。

しかし、ホントにこれで良かったのか……。
まあ、ここから学んでいくしか無いね。
では、また次回で会いましょう。

式ノ太刀　―おいでませ幻想の郷・前編―

さの　もりひこ、15さい。

ふと、きがついたら、“げんそうきよう”にきていました。

げんそうきようは、こわいところですよ。

まず、“ようかい”がにんげんをたべます。

ぼくもすでに2かい、くわれかけました。

とらうまです。

だけど、

「もっとこわいのは、」

アホな口調で独り言を喋り、箒を片手にしながら、目の前に光線が迫っている現実から目を背ける。

「……………“おんなのこ”です」

直後、爆音と俺の悲鳴が境内に響き渡った。

「ぐ、ぐあー……………」

幻想郷に来て、早十日。

十日前の戦いの傷跡は消えたものの、桜の花びらで酷いことになっている石畳の上を転がり、止まる。　仰向けに転がりながら見る空は、もう茜空になっていた。

（今日のじゃれ合いの原因は何だっけ？）

視線を横にずらすと、紅白の独特な衣装を纏った少女が、私のせんべいっ！と、叫びながら飛んでいる。

（なるほど。魔理沙が、霊夢が楽しみにとってやや高級な煎餅を勝手に食った、と）

更に視線を横にずらせば、やはり魔女のような格好をした少女が箒に跨って飛んでいる。

彼女達は、札や針、星形の弾やレーザーを撃ち合いながら、空を舞う。

十日前の俺からすれば、完全に化け物同士の殺し合いだが、今の俺からすれば、女の子同士のじゃれ合いである。

何と言っても、少し見方を変えれば何だか“綺麗”なのだ。

何というか、花火みたいな感じがする。

（……まあ、感覚が狂ったんだろうと言われたら、否定はできないけどさ）

自嘲気味に笑いながら、空で行われる少女達の弾幕戦を観戦する。

結果だけ言うと、今日は紅白の勝利だった。

負けた白黒は箒から落ちたが、きつと無事だろう。

心配するだけ無駄なのは、三日前に学んだ。

「守彦さん、大丈夫？」

倒れたままの俺の顔を覗き込むように、紅白の少女が俺を見る。

彼女は、博麗 霊夢。

博麗の巫女もとい、腋丸出しの巫女、略して腋巫女だ。

「あー、うん。生きてる。何でか知らんが、俺まだ生きてる」
「そう、それは良かった。じゃあ、御夕飯の準備よろしく」
「……………」

彼女は腋巫女もとい、鬼巫女だ。

「おっ、夕飯か。私の分も頼むぜ」
「……………先に言うことがあるだろ？」
「うん？何のことか分からないな」
「……………」

箒に跨り早くも復帰してきた白黒の少女。

彼女は、霧雨 魔理沙。

普通の魔法使い、改め魔砲使いである。

一週間前の怪我が未だに痛むのは、十割コイツのせいだ。
ちなみに、

「そういや、コレどうやって使うんだ？」

「……………いい加減、返せよ携帯」

「コレは私が拾ったんだ。だから、私の物だぜ」

そう言う彼女の右手に握られてるのは、俺の携帯電話だ。

どうやら、俺が寝込んでる間に掻払って行きやがったらしい。

他に、小型の音楽プレーヤーも盗まれたが、そちらは何処その古道具屋に売っ払ったらしい。

正しく、外道の所行である。

「マジで返してくんねえかな」

「無理ね。魔理沙に盗られた物が返ってくることはまず無いわ」

「うう……………」

霊夢にそう教えられ、がっくりと肩を落とす。

霧雨 魔理沙、彼女の本業はきつと、泥棒なんだと俺は思うことにした。

ため息をついて、渋々立ち上がり、箒を霊夢に預けて歩きだす。
俺の足取りは重い。

ここでの炊事は嫌いだからだ。
なぜなら、

（ああ、コンロやレンジって、偉大だったんだな……………）

かまどで料理は、結構しんどい。

そんなことを考えながら、ふと境内の桜を見やった。

七日前に見た時は、その圧倒的な美しさに息を呑んだものだ。

だが、今は花びらを境内にバラまく、忌々しい存在でしかない。

（そういや、集めた花びら、さっきので確実に散ったよなあ）

そう思い至って、魔理沙の分の味噌汁の具を減らすことを決定しながら、桜を眺めた。

こんなしょうもないことを考えながら、ふと気づく。

(……………馴染むもんだなあ)

心の底からしみじみと、そう思った。

少し空を見上げて、この十日間を思う。

最初の三日間はほぼ寝たきりだったが、それを差し引いても十二分に激動の日々だった。

目を閉じれば、その日々の出来事が鮮明に思い出せる。

最初に浮かぶのは、寝たきりの時期にあった。

腰に提げた刀に宿る元神様との、二度目の対峙である。



目を開く。

辺りを見渡す。

見えるのは、くろ、クロ、黒。

まさか、と思いながら、顔を青ざめる。

「やっと来たか、守彦」

後ろを見れば、やはり白い衣を纏った女性、自称元神の鹿島御
都が立っている。

「自称ではない。事実じゃ」

「さいですか」

ため息をついて、思い出せる限りの記憶を絞り出す。

目を覚まし、一言、二言、霊夢や魔理沙と話して……………、

「う……………」

それ以降の記憶が無い。

まさか、また刀の力に吞まれて暴れ始めたとか無いだろうな。

そして、またあの化け物と死闘を繰り広げる、と。

そして、どうにかこうにか目を覚ましたと思ったら、また吞まれると。

「何その無限地獄!!」

なるほど。

地獄とは、生きてるからこそ行けるところであつたか。

「妄想逞しいのは結構じゃが、お主の予想は全部外れじゃ」

「……………うん？」

「今のお主は、力尽きて気を失つとるだけじゃよ」

「……………おお」

何だ、良かった。

それはそれとして、御都はまたこちらの考えを読んだらしい。
結構恥ずかしいから止めて欲しい。

「何じゃ、男のクセに器が小さいのう」

「また読んでるし。プライバシーを大事にしろよ、エロババァババ
バババババツ!？」

ちょっと調子乗ったら、何か凄いビリビリきた。
正確には、雷撃を喰らった。

「ここでお主が消えることは、お主の精神が潰れることを意味する。
分かるな？」

「……………す、すひはせんでひた」

完全に脅しである。
神の癖に。

「元神じゃ」

ダメだ、ここだとマジで俺にプライバシーがない。
こんなところにいられるか、俺は現実に戻るぞ！

「……………何じゃ、変な顔して」

「そこは読はへえのかよ!？」

「お主が読んで欲しくないと言ったのではないか」
「うっ……………」

変な奴じゃのう、と首を傾げる御都を見て、ため息を一つつく。
別に、それ死亡フラグ、って件をやりたかった訳じゃない。
どうせ、読まれたって死亡フラグなんて言葉を御都は知らないだ
ろう。

……………何でだろう、虚しくなってきた。

「……………よくわからん奴じゃのう」

勝手にいじける俺にそんな言葉がかかるが、気にしない。

どうせ御都も大概な性格をしてるのだ。
俺がはっちゃけたって別に問題ないハズだ。

「正直、今更現状にすごく悲しくなってきたなんて、死んでも言えない」

「声に出とるぞ」

「…………あれ？」

口と頭でものを言うのが、ごっちゃになってしまったらしい。
しかし聡明な俺が、こんなお馬鹿なことになってしまうハズがない。

ああ、なるほど、これが神のいたずらと言うやつなのか。

「じゃから、元じゃて」

「…………お前、実はずっと心読んでるだろ」

そんなツツコミを入れながら、案外話せる奴だな、と御都の人物像を書き換えた。

ふと、そんな御都を見て思う。

心が読めるなら、実は空元気でテンションを保ってるのがバレてるのではないか。

（…………まあ、バレバレなんだろうな）

何やかんやあって、それを気にしているどころではなかったのもある。

だから、一度気にすると、やはりまだキツイのだ。

それでも俺、狹野 守彦は、家族を失い、天涯孤独の身の上なのだから。

「悲劇の主人公だぜ、ちくしょう」

「悲劇の主人公ならば、一つ男泣きでもしてみてはどうか？」

「ばーか。過去のことで一々泣いていられるか。俺は前向いて生きていくんだよ」

「…………左様か」

そう頷き、何か生温かい笑みを浮かべる御都から、恥ずかしいので眼を逸らす。

ちなみに、家族がみんな死んだ次の日から三日間、永遠泣き続けたのは俺の一生の秘密だ。

「んで、わざわざこんなところに呼び出して、何の用なんだよ？」

いい加減、閑話休題とする。

また暴れ回ってないのであれば、目が覚めればここから出ることになるのだろう。

だから、無駄話ばかりしてられないのだ。

「まあ、その通りじゃな。覚醒しておるお主の意識をこちらに引き込むのは、ちと骨が折れる」

流石に話が早い。

こういう時のみ、読心は便利だ。

「じゃろう？」

「どや顔すんな」

おっといけない。

ツツコミを入れていけば、また話が逸れてしまう。

「んで、何の用なんだ？」

「ふむ。そうじゃな。まあ、忠告を少ししておこうと思ったただけじゃ」

「忠告、か」

何についての内容かは、大体想像がつく。
きつと、あの刀についての話だろう。

「お主、もう能力を使うな」

「ああ、やっぱその話、……………って、え？」

残念、大ハズレでした。

「お主の能力は、分かるな？」

「あー、他の能力を抑え込む程度の能力？」

「うむ。まあ、分からんと言われたらお主をここから追い出すがな」

何でだろう。

スルツと口から俺の能力の内容が出てきた。

俺の能力は、とか真顔で言ったら、顔から火が出るぐらい赤面

しそうなもんなのに。

俺には本当に、能力が宿っているのだろうか。

「間違いなく宿っておるよ。まあ、“——”の力によって無理矢理発現した形ではあるがな」

「はあ」

何かマジらしい。

この元神様は嘘をつかない、と思うので、やはり事実なのだろう。まあ大体、化け物と戦ってる時に、散々使った覚えもあるし。

「お主の能力は強力じゃ。人の身には余ると言ってもよい。何せ、その攻撃に能力が絡めば、防御が可能になるのじゃからな」

「へえ………」

話を聞く限り、俺の能力は何か強いらしい。

その能力とやらを極めれば、絶対防御的な二つ名がつくのだろうか。

ヤバい、ちょっとカッコイイ。

「じゃが、お主は今能力を使えん」

「…………え？」

衝撃的事実発表。

脳内で、凄まじい爆発の中、傷一つ無く不敵に笑う俺の姿がブレイクされた。

ちよつと凹む。

「何で？俺の能力消えちゃったの？」

「うむ。言い方が悪かったか。正確には、お主は今も能力を使って

おるよ。それも全力で」

「……………うん？」

訳が分からない。

もつと簡単に頼むってばよ。

「抑えておるのじゃよ。――の能力をな」

「……………簡単につて言っただじゃん」

「簡単に言っただじゃろう。馬鹿なのか、お主」

「ごめん。言いたかっただけ」

首を傾げる御都を無視して、一人納得する。

肝心なところが聞こえなかったが、予想はつく。

間違いなく、あの“刀の力”を抑えているのだろう。

「お主が全力で押さえ込んで、ようやく何とかかっておる。能力を切れば、お主の精神は再び吞まれるじゃろうな」

「そうなのか……………」

どうやら、俺が絶対防御的な二つ名を手に入れることは無いらしい。

至極残念である。

（まあ、またあんなことになるのはゴメンだしなあ）

せっかく手に入れた能力が使えないのは残念だが、そういう事情なら仕方がない。

自分の意思関係無しに人を斬るのは御免だし、何よりあんな化け

物と対峙するのはゴメンだ。

「……………うん？」

ふと、あることを思い出す。

化け物との戦いの最後の最後。

俺はこの刀の力を能力無しに御しきっていなかったか。

「名を呼べば、この剣は応える。“お主とこの剣”が真に繋がれば、力に吞まれ狂気に堕ちることもない」

疑問を口に出す前に、御都が疑問に応える。

「名を呼ぶ……………？」

「名を呼ぶこととは、理解すること。さすれば、剣とそれを振るう者に隙は無し。じゃが、人には隙、つまり様々な雑念が多過ぎる。儂はそこを理解していなかった……………」

「はあ……………」

どうにも理解しきれない説明の上に、更に何か一人勝手に落ち込む御都に首を傾げながら、頭を回す。

とりあえず、

「刀の名前さえ呼んでやりゃ、もう俺の能力で抑える必要は無いんじゃないの？」

刀と俺が繋がると雑念が消えて何とかか何とか、の件は正直完璧

に理解できないが、大凡そんな意味だと思う。
御都は俺の顔を見て、ふむ、と一度頷くと、おもむろに口を開いた。

「――――」

「え？」

聞こえなかった。

結構注意深く聞いていたのに、欠片すら。

「聞こえぬじやろう？」

「え？あ、ああ」

「今言ったのが、この剣の名じゃ。聞こえぬのならば、お主はこの剣の名を呼べん」

「は？」

ここに来て、完全に理解が出来なくなった。
大体、俺はこの刀の名を呼んだじゃないか。
確か、確か、たし、か…………。

「あ、あれ…………？」

おかしい。

思い出せない。

化け物との戦いは最初から最後まではっきり思い出せるのに、刀の名前だけが抜け落ちてしまっている。

「覚えておらぬじやろう？」

「…………ああ」

「ならば、やはりお主はこの剣を理解しきれていない」

「うーん……。いやでも一度、俺は名前を呼んだぜ？」

「この剣がお主を呼んだからな。そうでなければ、お主は無意識に行使していた能力を切り、刀の名を探ることなど、しなかったじゃろう？」

「……………うん？」

確かに言われてみれば、あの状況で何故俺は能力を切ったんだっ
たか。

ほとんど無意識的に、能力を切るべきだと判断した気がする。

だが、その理由が、刀に呼ばれたからだとする、おかしい点がある。

その理論では、刀に意志があるみたいでは無いか。

「————にも、意志はある。付喪神にはならぬが、確かにこの剣は確かに意志を持っておるよ」

「……………意志が、あるのか」

「ああ。あの時何故、————がお主を呼んだかは分からぬが、な」

「……………ふうん」

なるほど。

ならば、俺は刀に気に入られれば、いつでもこの刀の凄い力が使えるようになると言うことか。

刀の手入れ、ちゃんと覚えておくべきだったな……………。

「まあ、————もかなり捻くれた性格をしておるが、今のお主のような適当な考えの人間に、力は借さんじゃろうな」

「むう……………」

今の俺じゃ、ダメなのか。

ならば、へりくだるよりも、高圧的に接しろということか。

「そういう意味では無い」
「ですよー」

まあ何はともあれ、あの刀が手助けしてくれたのならば、感謝はしないといけなさそうだ。

会話が途切れ、唐突に視界が急に暗くなった。

「うっ………」

目をこすり、しばたかせもう一度目を開く。

御都の輪郭が渦巻いてた。

やべえ、御都が滅茶苦茶キモい。

「ブチ殺すぞお主」
「ひいっ」

凄く低い声で脅された。

ここは自分にフォローを入れないと、と思うが視界がヤバくてそれどころじゃない。

目を開けてられず、瞼を閉じてしまう。

「まあ、なんじゃ。野垂れ死ぬような愚行はするなよ、守彦」

そんな言葉を最後に、御都の声は聞こえなくなった。



「はっ」

目を開く。

見知らぬ天井に、見知らぬ部屋。

とりあえず、布団の上で身体を起こして、周りを見渡す。

畳の上に卓袱台、台の上には茶葉を入れる筒と急須。

どうやら、俺は居間に敷かれた布団の上にいるらしい。

「あー………、夢、なのか？」

先程まで見ていた“夢”の内容を反芻しながら、右腕を伸ばす。

右手に固いものが当たり、それを握って引き寄せた。

その正体は“やはり”、あの刀である。

「………まあ、夢じゃねえわな」

両手で刀を握りこむ。

だが、特に何も無い。

何も考えなければ、何の変哲も無いタダの刀だ。

だが、意識を集中すると、確かに俺の能力と刀の能力がせめぎ合っているのが何となく分かった。

ため息を一つ。

「よお、ツンデレ刀」

そんな言葉をかけると、鞘から黒い靄が染み出すように溢れ出した。

少し冷や汗をかきながら、それでもニヤリと笑う。

「ありがとな」

恩には謝を返せ。

母さんの言いつけだ。

すると、靄が溶けるように消える。

(……マジで、ツンデレなのかも分からんなあ)

そんなことを考えて、苦笑しながら立ち上がった。

今度、手入れでもしてやろう。

「さて」

とりあえず、包帯を巻いてここに寝かせてくれた誰かに、お礼を言うことにしよう。

そう思って、襖の方を向いた。

すると、襖は既にほんの少し開いていて、

「おい、見たか？」

「ええ、見たわ」

その隙間の向こうに、二人分の片目があった。

「アイツ、起きてすぐに刀に話しかけてたぜ。どういう頭してんだ？」

「紫から聞いたけど、最近、外の世界で絵を映す箱にひたすら愛の言葉を捧げる男が増えてるらしいわ。あの人も、その類なんじゃない？」

「箱に！？ おいおい、相手は無機物だぜ？ どういう意味があるんだ？」

「私にも“外の人”の考えは分からないわ。でも、寂しい思いをしてる男の人程、そういう傾向があるみたい」

「そうなのか……。アイツ、外でよっぽど寂しい思いをしてたんだな」

片方の目に、憐れみの感情が籠もる。

同時に俺の両目から、光が消えた。

何だろう。

この状況は、中二の時に軽いものもらいになって眼帯を付けて学校に行った時、何故か俺が厨二病を患ったという噂が広まった時と、デジャヴを感じる。

このままではマズイ。

手遅れになる前に誤解を解こうと、口を開く。

「あのう……………」

「大丈夫だ！」

しくじった。

言葉を遮られると同時に、襖が勢いよく開き、魔理沙がこちらに歩み寄ってくる。

「外の奴らがどうかは知らないが、幻想郷の奴らは明るい奴の方が多いんだ。お前が一人ぼっちになることなんて絶対に無いぜ。何なら、私が友人になってやる」

輝かしい笑顔を浮かべてそう言い、魔理沙はポンと俺の肩を叩く。俺が真正のぼっちなら感動の涙を流す台詞だが、残念ながら現実の俺は冷や汗しか出せない。

藁にもすがる思いで、霊夢の方を見る。

彼女は魔理沙の様子にやれやれと頭を振り、こちらの焦ってますと言わんばかりの俺の顔を見返した。

そして、彼女は全部分かっていると云わんばかりの微笑を浮かべ、

「まあ、頑張りなさい」

こちらに親指を立てて、背を向けて去っていった。

クールだ。

だが、勘違いだ。

そんなこんなで、俺にとんでもないレッテルが張られた。

その後、何とかそのレッテルを剥がそうと四苦八苦するが、

あれから7日経った今でも、誤解は解けていなかったりする。

式ノ太刀 一おいでませ幻想の郷・前編一（後書き）

説明乙。

こんばんは。

えっち……、もといエッジです。

さて、プロローグ合わせて、第三話です。

説明回でした。

とりあえず、主人公は人なんです。

転生して、神や妖怪にはなりません。

強いて特徴を上げるとすれば、本人は否定してますが永遠の厨二病です。

俺と同じく。

さて、ではまた次回でお会いしましょう。

参ノ太刀　—おいでませ幻想の郷・中編—

六日前。

つまり、幻想郷に来て四日目に、俺は幻想郷について説明を受けた。

正直、その時は信じきれなかったが、間違いなくその時から、俺の常識は崩壊し始めていたと思う。



幻想郷とは？

「人間が妖怪を信じなくなった為に、消滅を余儀無くされた妖怪達が、それでも在り続ける為に創り上げた、一つの世界である！」

拳を握り声高々に、俺は霊夢から受けた説明のまとめを言い放った。

結構自信があつたのだが、俺の頭に霊夢のジト目による視線攻撃が突き刺さる。

「……………随分、端折った解釈ね。私の小一時間かけた説明の価値が問われるわ」

「大丈夫大丈夫。ちゃんと理解シテルッテー」

「……………何かムカつくわね」

そんなことを言ったって、しょうがない。

幻想郷、妖怪、神、霊、博麗大結界、幻と実体の境界、外の世界、妖怪の賢者、龍神様、e t c.。どれもこれも現実離れしていて、どうにもついていけない。

確かに、今自分の提げてる刀も大概だ。だが、これではもう漫画やゲームの世界に叩き込まれたと言われた方が納得できる。

全部が全部現実だと受け止められたら、それはそれで狂ってる気さえした。

「……………やっぱり、ついていけない？」

「まあ、な……………」

「それじゃあ、“外”に帰る？」

外、とは、文字通り幻想郷の外、俺のいた世界のことだ。つまり、

霊夢は俺に元居た場所に帰るのかと聞いてきているのだ。

そして、その問いに対する俺の答えは、

「……………いや、いい」

否、である。

俺が帰らない理由は三つ。

一つ目。

相手は相当な極悪人だったとはいえ、俺は人を斬った。

今日の日本の法律に私的制裁を認めるような法は無い。家族を殺されてようが、俺は紛うことなく犯罪者なのだ。

だが、捕まるのは御免である。

両親と良心には申し訳無いが、贖罪の責め苦は地獄の閻魔にでも

してもらうことにしよう。

二つ目。

腰に提げた刀、もとい妖刀が理由だ。外でこんなふざけたモノをもう一度暴走させたら、間違はなく故郷は血の海である。幻想郷というふざけた場所の、その中でもふざけた力を持つ人間二人がいたから、どうにかなったのだ。

だから、この刀を外に持ち出す気になれないのである。

三つ目。

これが最大の理由だ。

ズバリ、居場所が無い。

家族もおらず、下手をすれば指名手配されているかもしれないのだ。外に帰ったところで、もうそこに俺が平穏に生きていける場所はない。

「……………はあ」

「ため息つくぐらいなら、帰ればいいじゃない」

「だよな。だけど、そうは問屋が卸さんらしい。ちくしょう」

かくして、天涯孤独の俺は、故郷も失ってしまったらしい。

これも、人を斬った罰なのかも分からんね。まあ、高飛びに成功しただけだろ、と言われたら、ぐうの音も出ないけど。

「……………ぐう」

「何変な声出してんのよ」

「何でもない」

「ふうん。まあ、掃除や炊事を手伝ってくれるなら、しばらく泊めて上げるわ」

「え!?!泊めてくれんのか!?!」

思わず、目を丸くした。本意で無かったとはいえ、彼女にしたこ

とを思い返すと、とても今の言葉を信じられなかった。

「何よ、アテがあるの？」

「いや、無いけど……………」

気にし始めると、一気に罪悪感が膨れ上がる。

霊夢の顔を直視出来ずに顔を俯かせると、同時に彼女のため息が聞こえた。

「何、過ぎた話をいつまでも気にしてんだか。そんなんじゃ、ここで生きていけないわよ」

「……………本当に、恩に着る」

「だから固いつて。まあ、適当に働いてもらうから、覚悟しときなさい」

そこで会話は終わり、霊夢は立ち上がって居間から出ていった。

独りになった居間で、数秒程ぼんやりとする。

霊夢はおそらく、境内の掃除に行ったのだろう。なら、俺も手伝った方が良くはないか。

そう考えていると、

「……………うん？」

ふと、目の前の卓袱台に桜の花びらが舞い降りた。

流れてきた方に目をやれば、縁側に続く襖が開いており、その先で綺麗な桜が咲き誇っていた。

「…………みんなで見、したかったなあ」

少しだけ、声が震えてしまった。



幻想郷に来て五日目。

掃除や炊事はそこそこ慣れているので、何とかなりそうだと思い始めた日の話である。



「…………ふう」

境内を箒で掃き掃除しながら、何と無しに空を見上げた。

携帯電話と小型音楽プレーヤーを奪って行った、憎き魔女が飛んでいる。空を飛んでいる彼女を見て、この場所がどれだけ現実離れた場所なのかを再確認した。

「…………ふむ」

何と無く、手に持った箒に跨る。

跳ねてみる。

うん、飛べない。

「何やってんだ？」

「ふおっ!？」

振り向いたら、魔理沙がいた。どうやら、降りてきていたらしい。

「い、いや、空を飛んでみて………」

正直に言って、後悔する。

空を飛びたかったなんて、そんなドラッグの中毒者みたいな電波発言、

「飛べばいいじゃないか」

そんな発言があっさり受け入れられるのが、幻想郷だったりする。

「いや、普通の人間は飛べないだろ？」

自分で言い出しておきながら、呆れたような顔で心底アホらしそうに言う。大体、そんなに易々と空を飛べるなら、あの未来の猫型ロボットはあそこまで流行らないのだ。

まして、俺のような普通の人間が、

「飛んでたじゃないか」

「………うん？誰が？」

「お前が」

「え？」

俺、飛んでたらしい。

思わず、頭を抱えた。能力といい、一体俺はどうなってるんだ。幻想郷に来て妖怪とやらにでも、なったと言うのか。

「思い返してみりゃ、随分禍々しい翼を生やしてたなあ。ありゃ、人間というより妖怪だったぜ」

「マジかよ」

ふと、自分の身体をペタペタと触ってみる。特に異常は見られないことにホッとしながら、魔理沙を見た。

彼女はこちらを見て、首を傾げている。その様子は、嘘についてこちらの反応を楽しんでいるようには見えない。

「マジで、飛んでたのか……………」

「ああ、飛んでたぜ。思い出せないのか？」

「うーん……………」

言われて、あの時の曖昧な記憶を探ってみる。

斬って、斬りつけて、斬り裂いて、斬りまくって……………。思い出せたのは、非常に背筋が寒くなる光景だけだった。

前を見る。

目の前に、散々斬りつけた相手がいる。取るべき行動は、一つだ。

「悪かった!!」

「な、何だよ、いきなり」

被害者には、まず即土下座。これが、加害者の義務だと思っている。

「あ、ああ。もしかしくなくても、五日前のことを言ってるのか？」

「まあ、それしか無いけども」

言いながら、頭を上げる。

目に映ったのは、呆れ顔だった。

「何だよ、まだそんなことまだ気にしてたのか？」

「まだって、あんな酷いことしたんだ。お前も酷い怪我をしたろ？」

「あん？ヤバそうな傷には強めの薬塗つといたし、もうほとんど治ってるぜ？」

言いながら、魔理沙は前髪をかきあげる。そこには傷があったのだろうが、目を凝らしてみても傷痕すら見えない。

「魔法使いすげえ」

「だろ？」

思わずそう誉めると、魔理沙は嬉しそうに笑った。

しばし、啞然と口を半開きにしながら、痕の無い傷痕を眺め、首を左右に振った。

「って、そうじゃなくて、傷が云々じゃなくて、何というか、お前が気にならないのか？俺は、お前を……、」

殺そうとした、と言おうとして、どもってしまふ。自分でやった

ことなのに、認めることを恐れたからだ。

我ながら、情けない。

そう思いながら俯くと、魔理沙が深いため息をついたのが聞こえた。かなり、デジャヴを感じる。

「くどいな、お前。私が良いって言ってんだから良いじゃないか。大方、霊夢にも同じ様なこと言われただろ？」

その言葉に驚いて顔を上げれば、呆れ顔のまま苦笑する魔理沙の顔があった。

「今のお前を見てりゃ、私等に襲いかかったのも何かしら事情があるっていうのは分かる。そして、その事情は解決したんだろ？ だったらもう良いじゃないか」

本当に、全く気にしていない。顔を見れば、それが分かった。

「それでいいのか？」

「いいんだよ。どうしても納得できないなら、次の宴会で上等な酒でも持って来い。それでチャラだ」

「……………ふむ」

そこまで言われて、立ち上がる。

どうも、幻想郷には未成年の禁酒法は無いらしい。昨晚、霊夢が嬉々として日本酒の瓶を買って帰ってきたし。

まあ、今はそこが問題では無く、

「分かったよ」

了解の意を伝えることの方が、きっと大事だ。

約束だぞ、と言ってニツと笑う魔理沙に、少し困ったように笑い返す。

「さて、そんな話はともかく、空の飛び方は思い出したのか？」

「あ、ああいや……………」

「何だ、思い出せないのか……………」

そう言っただけ俺よりも残念そうに肩を落とす魔理沙に、首を傾げる。
何がそんなに残念なのだろうか。

「お前、随分速く飛んでたからな。スピード勝負でもしようかと思っただけだな……………」

それは、面白そうな話だ。

だが、やはり空の飛び方なんぞ、思い出せない。

「あー、すまん」

「本当に覚えて無いかー？」

適当に平謝りする俺に、魔理沙はジト目で疑ってくる。

しかし、覚えてないものは覚えてないのだ。つまり、飛べないものは飛べないのである。

しばらくして、魔理沙はやはり残念そうにため息を吐く。
その直後、ハツとしたように顔を上げ、ニヤリと笑った。

「なら、思い出させてやるよ」
「あん？」

その時の彼女の笑顔は、正に悪戯を思いついた悪ガキそのものだ
った。

だから、凄く嫌な予感がした。
彼女は持っていた箒に跨ると、後ろを指差した。

「乗せてやるよ。実際に飛んでみたら、感覚を思い出すかもしれないな
いしな」
「おお」

自分で感嘆の声を上げてから、少し考える。
人が飛ぶのだ、飛行機やグライダーのような機械無しで。それは、
危険では無いのか。
だが、

「……………」

空を見上げれば、これ見よがしに鳥が青空を飛んでいた。
俺も、あんな風に飛べるのだろうか。

「うーん……………」

好奇心が暴れ出し、理性がそれを抑えつける。
結果、

「じゃあ、頼むわ」
「そうこなくっちゃな」

好奇心が勝った。

箒に跨る。

魔理沙の肩を軽く掴んだ。

「よっ、と」

魔理沙の掛け声と同時に、フワリと足が石畳を離れた。

直後、空気が身体を抑えつけるように、上から下へと流れていく。
だが、それはすぐに止まった。

思わず閉じていた目を開く。

「うおおおっ!!」

空が近い。見える範囲が広い。
ともかく、

「すげえっ!!」

綺麗だった。

そして、

「よしっ、行くぜ!!」

感動出来たのは、それが最期だった。

魔理沙が水平方向に一気に加速する。

俺は恥ずかしがって、“軽く”魔理沙の肩を掴んでいた。その上、狭い筈の上で少し距離を開けていた。

結果、

「え？」

「あん？」

いきなり身体全体に叩きつけられた空気に、抵抗なんて出来なかった。

高くなる空、狭くなっていく景色。

そして背後に迫る“緑”に、ひたすら、

「ひええ……………」

絶望した。

ああ、両親と妹よ。俺ももうすぐにそっちに逝きそうだ。



結論だけ言えば、神社を囲む木々の枝がクッションになって助かった。

まあ、当日と翌日は布団の上から動けなくなったものの、軽症で済んだと言って良い。我ながら、なかなか頑丈である。

とか思っていたら、次の日調味料を盗んだとかで、霊夢に俺と同

じ様に木々の上に突き落とされた魔理沙が、無傷で現れた。
そして、

「ひ弱だなあ、お前」

昨日のことを謝るでもなく、笑いながら言い放った。

何時か空を飛べるようになってコイツを地面に突き落とす、そう誓った。

俺は、霊夢や魔理沙のことを器のデカイ人間なのだと思っていた。
だが、単に過去を振り返ることを知らないガキなだけかもしれない。
い、今はそう思い始めている。

参ノ太刀　—おいでませ幻想の郷・中編—（後書き）

主人公は、何だかんだで本家主人公の二人に頭が上がりません。

それをハッキリさせたかったハズなんです、なかなか上手くプロット通りにいきませんね。

次は妖怪が出ます。

ええ、ようやく。

ではでは。

肆ノ太刀　—おいでませ幻想の郷・後編—

妖怪。

それは、幻想郷が“幻想”郷足り得る為に、必要な存在の一つだ。彼らのような幻想的な存在が無いならば、幻想郷という“場所”は存在していなかったのかもしれない。

そして、幻想郷に来て八日目。

俺は初めて妖怪と出会った。



日が傾いてきた時間。

縁側で茶を飲みながら、俺はふと興味本位で霊夢に尋ねた。

「妖怪って、どこに居るんだ？」

「喰われるわよ」

色々すっ飛んだ解答が返ってきた。

居るという話を聞いていたから、少し好奇心が湧いただけだと言
うのに。

というか、やっぱり妖怪は人を喰うのか。おっかないな。

「まあ、別に見てみたいとか、そういう訳じゃなくなてな。どんな場所にいるのかな、とか」

「…………まあ、夜になったらそこら中に湧くわよ」

「湧くって、そんな虫みたいな。ってか、そこら中に湧くなら人里まで行くあの道も、危なかったってことか？」

「まあ、昼間に人を襲う奴なんて、滅多にいないわよ」

「滅多にって、つまり時々には出るんだろ！？」

焦って叫ぶように尋ねる俺に対し、そうだけど、と何でもないことのように首を傾げる霊夢。

もしかして、妖怪が出て俺なら撃退出来るとか考えているのだろうか。そうだとしたら、頂けない。

残念ながら、“あの時”の俺と今の俺は別物である。妖怪とやらが文字通りの化け物ならば、俺は“タダの人”として喰われる他無い。

（幻想郷って、怖いところなんだな……………）

ズズズ、と茶を飲みながら、出かけるのは日中だけにしようと決心する。

「あ」

「うん？」

嫌な予感がした。

あ、このくじ引き当たるかも、とかそういう予感は当たらないのに、悪い予感によく当たるものである。

そして、今回も例に溺れず、

「食材を買ってなかったわ。守彦さん、ちょっと買ってきてもらえ
る？」

「やだ」

「ありがとう。それじゃ、鶏肉と白菜と、ほうれん草。あ、あとお
味噌もお願いね」

「やだ」

「寄り道と無駄遣いは厳禁だからね。御夕飯が遅くなっちゃうから」
「……………何で、午前中に思い出さなかったんだよ」

うん、知ってた。俺に拒否権なんて無い。

こちらの愚痴を流し、霊夢は袖から財布を取り出し、こちらに投
げてきた。それを嫌々受け取ってポケットにしまいながら、ため息
を一つ。

今の空の色は茜。いわゆる、逢魔が時であった。

「……………ちくしょう」

無事に帰れることを祈りながら、全力で石段に向けて走り出した。

「……………飛べばいいのに」

「だから、俺は飛べねえの！！」

呆れたように言う霊夢に思わず怒鳴る。もしかしたら、本当に俺
の実力を誤解してるのかもしれない。



人里。

幻想郷の人間達が住む場所だ。ここにも妖怪は訪れるようだが、ここで人を襲うことは禁じられているらしい。無論、俺はここで妖怪を見たことが無い。

何とか、日が沈まぬ内に辿り着いた。一応、博麗神社から一本道なので、迷うこともなかった。

何処ぞの江戸村を想起させる町並みに安堵の息を吐きながら、俺は人里の門をくぐる。

ここには、午前中に服を買う為に訪れている。ほんの僅かだが、脳内に地図は出来ていた。

まずは、肉屋に行くでしょう。

(しっかしまあ、やっぱり洋服じゃ大分浮くのかね)

周りを見渡せば、行き交う人々は大概和服である。

洋服が珍しいのか、それとも外の人間だと見破られてるのか、行き交う人々の視線が痛い。意識過剰の被害妄想かも分かんが。

「おや、まだいたのか？」

キヨロキヨロと見回して、脳内地図と示し合わせる俺に声がかかる。

前を見れば、青を基調とした服を纏う、青いメッシュの入った白

髪長髪の女性が立っていた。

彼女の頭上の不思議な形の帽子を眺めながら、彼女は誰かを思い出す。

「おお、上白坂さん」

「上白沢だ」

間違えた。



今日の朝。

唐突に、服が一着だけだと不潔だから、人里で服を買って来いと霊夢に言われた。

財布を渡され、適当な道の説明を受け、初めて人里に乗り込んだ。結果、迷子。うわーん、コドコー？ と、（棒読みで）泣き叫ぶ俺に、優しく声をかけてくれたのが、

「いやー、助かりました」

「まあ、これぐらいはな」

買い物袋を提げた俺の隣を歩く、上白沢 慧音さんである。

不確実な脳内地図ではなく、慧音さんの案内の下、買い物はスムーズに終了した。

おかげで、空の色はまだ茜色だ。急げば、日が暮れる前に帰れるかもしれない。

「しかし、あの巫女のところに居候とは、お前もなかなかもの好きだな」

「ははは、まあ確かに」

言われて、乾いた笑みを返す。

霊夢は、自己中とはまた違うのだが、何というかこう、掴み辛い時々、そこにいるのにいない感じもする。

だからと言って、気味が悪いという訳でもないのだが。

「お前が望むなら、仕事と家を見繕うぐらいできるぞ？」

「あー、それはありがたいっすけど、遠慮します」

「ふむ。外から此方に来て、いきなり人里に住むのに抵抗があるのも分かるが、此処ならば、すぐに馴染めると思うぞ」

「気のいい人達ばかりかですしね。まあ、それは分かってますけど……」

……」

いきなりやって来て、襲いかかって、勝手に倒れて、少し面倒見たと思ったら、人里の方がいいからサラバ！

それは、人としてどうだろうか。

「けど？」

「まあ、色々……」

そう思いながら、苦笑して言いよどむ。

そんな俺を訝しげに見ながら、すぐ得心がいったとばかりに慧音さんは笑い、

「あの巫女は、あまりオススメ、」
「違います」

彼女の言葉を遮るように宣言した。
断じて言おう、下心は無い。決して無いのだ。

(……………確かに、綺麗だとは思うけども)

ほう？ とニヤニヤ笑う慧音さんにため息をつきながら、人里の
出口に向けて歩いていった。



慧音さんにお礼を言って、人里を後にして15分ほど。

「……………しくじった」

博麗神社への参拝道をひたすら走りながら、呟く。

ふと空を見上げれば、月が愚行を犯した俺を嘲笑うようにそこに
鎮座していた。

愚行、つまり、俺はのんびり話すぎたのだ。

だって、しょうがないじゃないか。美人なんだ、慧音さん。楽し
いじゃないか、綺麗なお姉さんと談笑するのは。

(……………俺、欲求不満なんだろうか。いやいや、思春期なだけだ、
うん)

自分に言い訳しながら、ひた走る。目的地まで、あと半分といったところか。

ゴリ、グチャ…………

「ん？」

ふと、何かが聞こえた。
周りを見回すが、特に何もない。

ブチブチ、ピチャピチャ…………

「何だ…………？」

二回目の不審な音で、何とかその出所を掴んだ。
どうも、参道脇の草むらの向こうから、この音は響いているらしい。

どうにも気になって、草むらを掻き分けて見に行くことにした。
そして、その先にて、

「もぐ、うぐ…………」

食事中の、少女を見つけた。

金髪で、上に白いブラウスと黒いシャツ、下に黒いスカートを纏

った小柄な少女。

彼女はうずくまって、一心不乱に何かを食べていた。

（木の実とか拾い食いしてんのか？ いや、こんな夜中に拾い食いなんで……）

そんなことを考えながら少し横に移動して、彼女が何を食べているのか見ようとする。

そして、その食事風景に、俺は言葉を失った。

少女が食べていたのは、“人”だった。最早、表情すら読み取れないほど食い散らかされているが、紛うことなくソレは人だった。

（………か、カニバリズム！？）

食人。現実になんかこういうことをする人間がいる、というのは聞いたことがある。

だが、まさかこんな場所でこんなものを見ることになるとは。

（………っ。うぐ）

けっこうな吐き気を感じながら、それでも気取られないように息を潜める。

不幸中の幸いに、死体を見るのは初めてでは無い。まだ何とか、耐えられる。

「（ぐ………）」

耐えられるが、これはあまりにグロテスクだ。鴉が雀を貪る様は見ることがあるが、これはその比では無い。

一瞬、少女に何か言うべきではないかと逡巡するが、ここは触ら

ぬ神に祟り無しの方が正しいだろう。早めに逃げることにしよう。

(…………焦るな。ゆっくり、後ろに下がるんだ)

そろりそろりと、ゆっくり後退りする。幸い少女は食事に夢中で、こちらに気づく様子も無い。

(…………それにしても、幻想郷にはこんな風習があるのか?)

神社で、霊夢が包丁を研いで俺を待ってたらどうしよう。

そんなことを考えながら、俺は顔を青ざめる。

そして、そんなことを考えているから、

――バキッ

ベタに枯れ枝を踏み折ってしまったのだろう。

どうしよう。

見てる。すごい見てる。熱烈に見てる。

瞳孔が開いて、口の周りが血で染まり、バカみたいに犬歯が鋭いことを除けば、見た目は美少女だ。

とてもじゃないが、人を食べるような人間には見えない。

いや。

とても、“人間とは思えない”。

「…………お前、“妖怪”か？」

何故、そんなことを聞いたのか。正直、さっぱり分からない。
何となくそう思ったのだ。所謂、勘である。
そして、

「そうだよ。わたし、“人喰い妖怪”」

金髪の少女は、天真爛漫な笑顔を浮かべてそう言った。

妖怪との初遭遇である。

それも、

「…………人喰い、ね」

「うん。それで、アナタは人類？」

「ああ。俺は人間だ」

「そーなのかー」

俺も喰われるのかな、と考えながらため息を一つ吐く。あの刀を
神社に置いてきた自分を、酷く責めたくなった。

（…………食材を持ち帰れなかったら、霊夢怒りそうだなあ）

目の前にいる脅威から視線を逸らすように、虚ろな目で空を見上
げる。

でも、確かにあの鬼巫女なら、喰われたことよりそっちのことに
怒りそうだ。

「アナタも食べてもいい？」

「……………うん？」

死んでまで怒られるって、中々嫌だなあとか考えていると、人喰い妖怪が唐突に尋ねた。

だが、質問の意味をよく分からずに、俺は首を傾げた。そんな俺の様子を見た人喰い妖怪も、可愛らしく首を傾げる。

「アナタは食べてもいい？」

どうも、俺が質問を聞き間違えた訳じゃ無いらしい。それなら、そんな質問、答えは決まってるじゃないか。

「いや、食べたらダメ」

そう答えると、人喰い妖怪は眉根を寄せて、酷く哀しそうな顔をする。

「そーなのか……………」

残念そうにそう呟くと、人喰いはクルリと身を翻してしまった。少しだけ、人喰い妖怪の哀しそうな顔に罪悪感を覚えたが、直後に聞こえてきた湿った音にそんな感情は吹き飛ばされた。

俺は暫し、人喰い妖怪の食事風景を眺めていた。

彼女が妖怪と分かると、何故かその光景が自然なものに見えてしまう。

「ふう。ごちそうさま」

気がつくと、人喰い妖怪は食事を終えてしまっていた。
人喰い妖怪の声に反応して、思わず身構える。しかし、人喰い妖怪はこちらに見向きもせず地面を蹴って飛び上がった。

「うおっ!？」

直後、人喰いの周りを真っ黒な球体が覆い尽くす。
夜空よりも暗いそれは、フラフラとどこかへ飛んでいった。

「……………、」

木々によって切り取られた夜空から、あの球体が消えて数秒。

「助かった、のか？」

ポツリと呟いてみた。
無論、答えは無い。

視線を下に戻す。

「ん」

髑髏と、目があった。
何だか、怨めしげに睨まれてる感じがする。

「そう睨むなよ……………」

少し疲れたようにため息をついて、更に視線を下げる。

「うん？」

足元に、何かが転がっている。
拾い上げてみれば、それは、

「携帯………？」

何故、こんなものがあるのだろう。
不思議に思いながら、周りを見渡すと引き裂かれた“洋服”の残骸がすぐ近くに落ちていた。
まさか、と思った。

「外の、人間………？」

尋ねるように呟いた。

しかし、髑髏は答えない。

手の中の携帯電話に目を向け、折り畳み式のソレを開く。ディスプレイにはヒビが入り、フレームも傷だらけだった。

それでも、ボタンを一つ押してみる。

ディスプレイに、光が灯った。

そこには――――



その日はそれから骨を埋めて、神社に帰った。

案の定、遅いと霊夢に怒られたが、こちらが土まみれなのを見ると、それだけで事情を察したのか、夕飯の席で説明をしてくれた。

曰わく、幻想郷に紛れ込んだ外の人間の未来は大体三つらしい。

一つ目は、博麗神社、もしくは入り込んできた結界の緩んだ点から、外に帰る。

二つ目は、そのまま残って、幻想郷の人里で暮らす。

そして、三つ目。

妖怪に喰われる。

「お前、あの質問に何て答えたよ？」

翌日の昼。

あの人間の骨を埋めた場所で、俺は聞いてみた。

だがやはり、春風が気持ちよく吹き付けていく音以外、何も聞こえない。

あの携帯電話を取り出して開いてみる。しかし、もう完全に壊れてしまっていて、何も映らない。

「はあ……………」

ため息を一つついて、携帯電話を放る。携帯電話はあらかじめ少し掘っておいた穴に入り、俺はそのままそれを埋めた。

霊夢曰わく、外から幻想郷に来る人間には、大概一つの共通点がある。

ほとんどが、死にたがっている人間なそうだ。

「死にたがり、ねえ」

昨日、携帯電話のディスプレイに映ったのは、ある一通のメールの本文だった。

両親に対する謝罪と別れの文だった。どうも彼は、学校のイジメに耐えられなかったらしい。

「…………俺も、もしかしたらこうなってたんかね」

思わず、そう呟いた。

最も、俺の場合は逆に殺しまくってたのかも分かんが。

自嘲気味に笑って、場を後にしようと振り返る。
そこには、

——グル…………

身体は蠅螂、頭は狼の化け物、もとい妖怪がいた。

「………………………」

空を見上げる。綺麗な青空だ。
頬を捻る。痛い。夢じゃない。

「……………昼間は滅多に会わないんじゃないか」

真面目に泣きたくなりながら、いい加減な巫女に愚痴を漏らす。
鎌を振り上げる妖怪に対し、

「お、俺は食べたらダメな人間ですよ……………」

魔法の言葉を唱えてみる。

すると、あらビックリ。妖怪は鎌をピタリと止めて、

——グオオオオオオオッ！！

一吼えして気合いを入れ直し、思いっきり振り下ろしてきた。

（あ、言葉が通じない妖怪もいるんだあ）

その日、その後の意識は、曖昧である。



そんなこんなで十日目。

結局、昨日は奇声をあげて走り回る俺を魔理沙が発見し、助けてくれたらしい。九死に一生である。

何とか、自己防衛できる程度の力を手に入れないとなあ、と考えながらため息をつく。

まあ、背後の二人がさっさと飯を作りにいけと視線を突き刺してくるので、考えるのは後にしよう。

肆ノ太刀 ーおいでませ幻想の郷・後編ー (後書き)

あと二、三話で、紅霧異変かな。

伍ノ太刀　一ゆらりゆられて三途の川

「よし。到着だぜ」

「おっ」

乗せてもらっていた箒から降り、地面に降りる。

眼前には、何とも言えない不思議な雰囲気醸し出す道があった。

「それじゃ、適当に迎えに来てやるよ。覚えてたらな」

「……………ここまで来たら、もうちょつとぐらい付き合ってくれてもいいじゃんよ」

「こんな道を通るのは、死んでからだけで十分だぜ。もちろん、あの川”に行くのみな」

「はいはい。まあ、ありがとな」

「はいよ。ただし、このケータイとやらの使い方、ちゃんと教えるよ」

「分かってるって」

飛んでいく魔理沙を見送って、クルリと道に向き直る。

遠くの方に、屋台が見える。あれが獄卒、もとい、獄卒試験中の霊が経営する屋台だろうか。

「何か買わなきゃ呪う、とか言わねえだろうな……………」

ベルトに差した刀の柄を触り、なけなしの小遣いが入った財布の口を閉め直して、俺はテクテクと歩き出す。

目指すはこの“中有の道”の先にある、“三途の川”だ。



ことは春の穏やかで暖かな一陣の風と、

「ギャアアアアアアアッ!!」

一発のマスタースパークから始まった。

毎回毎回あんな光線を喰らって、何故まだ生きているのか不思議に思う。

思いながら、何時もの様に愛しい大地の抱擁から両手を使って抜け出す。

「ああ、俺を優しく受け止めてくれるのはお前だけだな、地面よ」

「相変わらず、無生物に愛の言葉を送るのが好きなんだな」

「デメエなんか嫌いだ、地面。固いし」

未だに解けない、無生物愛者だという誤解。いつになったら解けるのだろうか。

まあ、それはさておき、

「マジで死ぬから、マスパを撃ち込むのは勘弁してくれ」

「略すなよ。いいじゃないか。生き残ってるし」

「当たり所が悪いとかもあるだろ。大体、お前飛んでんだから、ドロワ見ら、」

その瞬間、本日二度目のマスパが俺を襲った。

その閃光は、買ってまだまだ日の浅い俺の和服を見事にお釈迦にする。ああ、霊夢に怒られる、と涙目になりながら転がる境内。

「…………俺の何が悪いんだよ」

「そうだな。色々あるが、まずデリカシーが無い」

彼女いない歴〓年齢の俺に、そんなものを求めるな。

まあ、女性に下着が見えた見えないは、言うべきでは無かったかも分からんが。

ボロボロになった和服から、幻想境に来たときの洋服に着替る。

それから、おぼんに茶を淹れた湯のみを乗せて、縁側へ持って行く。誰か来たら、とりあえずお茶。博霊神社の慣習らしい。多分。

魔理沙と並んで、茶を啜る。うん、落ち着く。

「そーいや、霊夢は？」

「何か、人里の人間襲う馬鹿な妖怪が出たらしくてな。お仕事だよ」

「それは、ご愁傷様だな」

「誰が？」

「決まってるだろ？」

ククク、と笑う魔理沙を尻目に、俺はため息を一つ吐く。同時に、何度か見た、戦闘モードに入った霊夢を思い出す。

一言で言うと、圧倒的である。何時もののほんと平和ボケしている姿が、嘘としか思えないほどに。

暴走した俺は、あの霊夢とこの魔理沙を相手取っていたらしいが、文字通り、夢のような話だ。

「俺なんて一発二発撃たただけで、死にそうなものにな」

自嘲気味に笑いながら、ポツリと零す。

そして、その呟きに魔理沙が噛みついてきた。

「おいおい、よく言うぜ。そんなにピンピンしてるくせに」

「ハッ。空元気だよ。大体、お前が本気でぶっ放してきたら、余波だけで死ねるさ」

「ほう。じゃあ、今度試してみるか」

「勘弁してください」

手加減されても、回避不可なのだ。本気を出されては、死亡確定である。

「しかし、そこまで余裕な面されると、私の自信に関わるんだよ」

「だから空元気だって。さっきも、綺麗な花畑と三途の川が見えたし」

苦笑しながら言う俺に、魔理沙は片眉を上げて腕を組んで首を傾げる。

「三途の川の近くに、綺麗な花畑なんてあったのか？」

「あ？ いや、流石に冗談なんだが……」

真剣に尋ねられて、面食らいながら肩を竦めて答える。すると、

魔理沙は深くため息をついて、

「何だ、冗談かよ。三途の川の河原には、彼岸花ぐらいいしか咲いてないって香霖も言ってたからな。騙されたのかと思ったぜ」

「…………ふうん」

彼岸花、か。確かに、三途の川と来れば連想するものの一つだ。だが、彼岸花ぐらいいしか咲いてないと断言するなんて、そのコーリンとやらは何の根拠を持って言ったのだろう。それではまるで、

「そんな、三途の川が実在するみたいなのを……………」

「……………何言ってるんだ？妖怪の山の向こうにあるじゃないか」

「え？」

「あん？」



詳しく話を聞くと、幻想郷には三途の川があるらしい。もちろん、そういう名前の川ではなく、マジもののやつが。

しかも、此岸までは生きたままで行けるときた。

「……………なら、行ってみなきゃな」

喧しい客引きの声に、耳を塞ぎながら歩く。
最初に霊を見た時は少しビビったものだが、もう慣れた。という

か、ひたすら煩い。

屋台の霊共、やたら元気である。死んでるのに元気とか、これにかに。

「流石、幻想郷人。死んでも気質は衰えずってか」

バカは死んでも治らない。救いようが無いね。

（霊夢や魔理沙も、死んでもあんな感じのままなのだろうか）

そんなことを考えながら、しかし、あの二人が死ぬ様を思い浮かべず苦笑する。



テクテクと歩いていると、ふと目の前に人影を見つけた。どうも、屋台の霊と話をしているらしい。

「おお、毎度ありがとな小町ちゃん」

「いやいや、そっちこそお疲れさん。おっと、お代をちよろまかなよ。あとちょっとで終わるんだから」

「ははは。分かってるよ。いい加減、地獄も飽きたさ」

そんな会話を繰り返るのは、癖のある赤髪をツインテールにした、赤い瞳の女性だ。

強面の霊を相手に、心の底から暢気な笑みを浮かべている。

「……………あの人、生きてんのかね？」

血色も良く、瑞々しい彼女の肌は、死んでいるとは思えない。まあ、現在進行形で喧しく客引きしてくる霊共も、死んでいるとは思えないが。

「ん？」

「お？」

ぼんやりと突っ立っていたら、赤髪の女性と目があった。暫くお互いキョトンとしていたが、女性が不意に一步を踏み出す。そして、

「やあ、お兄さん」

「おわっ!？」

一瞬で目の前に現れた。

「うん。やっぱり、アンタ死んでないね。生きながらにこんな所に来るとは、アレかい？屋台目当て？いいね、是非曲直庁の財布係が喜ぶよ」

「い、いや……………、アンタ何者？」

「ん？ああ、あたいは小野塚 小町。そう言う、物好きなアンタは誰だい？」

「え、と、狹野。狹野守彦」

「そうかい。まあ、よろしく」

「あ、ああよろしく」

スツと出される手をぎこちなく握る。

さて、彼女は“何者”なのだろうか。とりあえず、敵意は無さそうだが。

いや、そんなことより、この小野塚小町とやら。名前に『小』が二つもついているのに、やたらと大きい。

何がとは言わない。というか、言わせるなよ。

「さて、守彦。真面目にアンタ、こんなところに何の用だい？ 見た感じ、屋台目当てじゃないようだし」

「え、ああ、三途の川に用がありました」

「……あたいが言うのも難だが、アソコは面白い場所じゃないよ。行くなら、死んだ後だけで十分さ」

「いや別に珍しいもの見たさじゃなくて、その、何というか……」

「ああ、自殺かい？」

「違う」

別にそこまで思い悩んじやいない。

とはいえ、本当に野次馬根性だけで、こんなところにいる訳でもない。一応、目的らしい目的はある。

ただ、言い辛い。何とも、言い辛い目的があるのだ。

「……まあいいか。詳しい事情は分からないが、三途の川まであたいが付いてってやるよ」

「え？」

「ふふん。男の一人旅なんて、虚しいもんだろう？」

「いや、別に」

「……虚しいだろう？」

「いや、別に」

「虚しい、だろう？」

「…………虚しい、ですね。凄く」

まさかのドラクエ式無限ループ。幻想郷に使い手がいうとは、露とも思わなかった。

ともあれ、小野塚小町が仲間になった。

「はあ……………」

「うん？こんな美人を侍らしておいてため息たあ、贅沢な小僧だね、ん？」

「ちょっ！？近い近い！！」

「ははは。初だねえ」

唐突に肩を組まれ、滅茶苦茶焦る。あと美人とか自分で言うなど叫んでやりたい。

（まあ確かに美人だけでも！！結構ドキドキするけども！！）

そんな煩惱を追い出すように肩を組んでくる小町を振り払い、顔が熱いのを冷ますように早歩きで歩き出す。

ククク、小さく笑う声が後ろから聞こえた気がするが、無視である。作戦は、ガン無視でいこう。



「うちのボスはね、酷いんだよ？あたいが珍しく早めにノルマを終えて、達成感を感じながら昼寝してたんだ。そこに来るやいなやあたいを叩き起こして『またですか小町！！』って、いきなり叫んでさ」

「そりゃアンタ、日頃の行いが悪いからそうなんだろ？まあ、よっぽど上司に信頼されてねえんだな」

「うわ、このガキヤ、ボスと同じこと言いやがって。あたいだってね、やるときややるんだよ、やるときやね」

「そのやる時とやらない時の比率がおかしいんだろ？」

「…………四季様と同じことを言うな！！」

最初こそ、厄介なのに絡まれた、ああ不幸だ、とか、思っていた。だが、気が付けば不思議と打ち解けている。

この人、中々どうして喋りが上手い。随分と話慣れてる感じがする。

「そういや、小町さん。アンタ何の仕事してるんだ？」

「呼び捨てでいいよ。そうだね、“渡し”かな」

「…………渡し？」

「舟の渡しだよ」

「ああ、なるほど。それで喋りが上手いのか」

「おっ。嬉しいこと言うじゃないか。何時もの客は“口が利けない”からね。褒めてもらえると自信がつくよ」

「…………？」

何か、意味がよく掴めない部分があったが、どういう意味だろうか。

口が利けない。よほど寡黙な客か、こっちが口を開けないほど高貴な客しか乗らないのだろうか。

「……………運賃とか、高いのか？」

「ん？ああ、そりゃもうべらぼうに。アンタには文字通り、一生縁が無いだろうね」

「ふうん」

冗談めいた口調で言う小町に、気の抜けた返事を返す。だが確かに、そんなに立派な舟ならば、きっと乗ることもないだろう。

（……………あれ？）

ふと、ようやくこの疑問が沸いた。

何故、小町はこんな所にいるのだろう。

仕事の休みにこの中有の道の屋台まで、遊びに来たのだろうか。
女性独りで。

（うん。不自然）

ここに来るには、妖怪の山とやらを通らなければならない。名前通り、妖怪の多く住む山なそうだ。

ここに飛んで来る途中にも、いきなり飛び出てきた白髪獣耳の少女の妖怪を、魔理沙が跳ね飛ばしてた気がするし。

あの轢き逃げ魔法使いは例外として、妖怪いるということは、つまり危険なのだ。一般人には、とても。

出会って直後のあの“瞬間移動”をみる限り、確かにタダ者では無さそうだ。それでも、そこまでしてここに来る価値があるのか。

「おう小町ちゃん。相変わらず別嬪だね。いやぁオッサン、死んで

るのに元気になっちゃうよ、ガハハハハ!!」

うん、絶対ねえわ。

そう結論付けつつも、自分も目的を言っていないのに気づいて、直接聞くことはしなかった。

下卑た霊の言葉にも、明るい笑顔を返す小町を横目に見ながら、ふうとため息をつく。

気が付けば屋台の数が減り、彼岸花の数が増えてきた。目的地は近そうだ。

「はい、到着つと」

「おお、ここが……」

中有の道を抜け、目の前に広大な川が現れる。薄くかかった霧のせいで、向こうの岸は全く見えない。

川に近寄って、川の中を見してみる。すると、

「…………イルカ？」

何か凄いのがいた。

「おおそれは魚竜だね。まあ正確には、魚竜の霊か」

「…………ぎよりゅう？」

「そ。9000万年前に絶滅しちゃったらしいね。」

「…………マジかよ」

驚きながら、魚竜とやらをまじまじと見つめる。口を開けると、鋭い歯が並んでいた。

「ほへえ……………」

もう少し近くで見てみたくなって、一步踏みだそうとする。その瞬間、

「はい。待ちな」

「うぐえっ」

小町に襟を掴んで引っ張られた。

盛大に咽せながら、恨めしげに小町を睨む。すると、彼女は呆れたように肩を竦めた。

「あんまり、川に近付かない方がいいよ。落ちたが最後、死んでも上がってこれないからね」

「…………マジすか」

衝撃的事実発覚。、三途の川は実は底なし沼だった。

まあ、沼じゃないけど。普通に水流れてるけど。

ともあれ、

「結構おっかないなあ」

「だろう？だから、観光地としちゃ、あんまりお勧めはできないのさ」

「ふうん」

泳ぎ去っていく魚竜の霊から視線を外して、辺りを見渡す。

立ち込める薄い霧に、咲き誇る彼岸花。そして、小さく響く川の水音。

（風流っていうより、ひたすら物悲しい感じだなあ）

なるほど。確かに観光に来なくなる雰囲気ではない。



暫くこの川の雰囲気呑まれ、ぼんやりとしていた。
そんな俺の意識を、小町の一言が呼び戻した。

「さて、守彦。アンタ、目的は果たせたのかい？」

「あ、ああ………」

言われて、思い出したように周りを見渡す。俺が探してるのは“ある人”、もとい“ある霊”だ。

「うん？」

そうしていると、小町の背後に人影を見つけた。

輪郭は酷くぼやけて、表情は薄いというよりのつぺらぼうのよう
で全く感情を伺えない。

ただ、眼があるのかどうかも確認できないのに、鋭く睨まれている気がした。

そんな人影をずっと見ていると、不意にその気配が大きくなり、

「……………え？」

その姿が巨大なものになっていった。

「ん？どうしたんだい？」

こちらの視線に気づいた小町が首を傾げる。それと同時に、巨大な人影が腕を振り上げる。

嫌な汗が噴き出した。

「小町、避ける！！」

「え？」

とっさに叫ぶ。

しかし、小町は動かずに背後を確認しようとして、

「バカ！！先に避け、」

俺の声よりも先に、人影の拳が先に小町に届いてしまった。

「っっ！！！？」

拳圧の衝撃が来たと思えば、すぐに飛び散った河原の砂利が、しこたま俺の身体を打ち付けた。

悲鳴すら満足に上げられず、顔を守るように腕をクロスする。

「ぐ、ぎ……………！！」

歯を食いしばり、ひたすら耐える。

たった数秒にも満たない時間が、やたらと長く感じられた。

両腕を下げ、恐る恐る前を見る。そこには人影の拳も、小町の姿もなく、

「……………嘘、だろ」

冗談かと思うほど、大きなクレーターが出来上がっていた。底は見えないが、あそこに立っていた人間がどうなったか、想像は難くない。

「うっ」

思わず、吐きそうになった。だが、直後にヒリつくような殺氣を感じて、無理矢理それを飲み込んだ。

前を見る。人影は、こちらに向けて拳を振りかぶっている。

「……………ちくしょう」

震えそうになる足を気合いで抑え込む。腰に差した刀の柄に手をやり、一息に抜き放つ。

「……………、」

黒い靄が湧き出したり、まして蒼い衣が現れることも無い。哀しいかな、力を抑え込んでいる以上、これはタダの日本刀である。

「くっそ」

俺の悪態をつくのと同時に、人影の拳が放たれる。俺は、全力で後ろへ飛んだ。

直後、再び響き渡る轟音と共に、三途の川での攻防の火蓋が切つて落とされた。



「うおおおっ!!」

全力の怒号。

しかし、それは攻撃の為に気合いを入れる為に出したのでは無い。全力で逃げる為の怒号だ。

背後で連続する轟音と、飛来する砂利に涙目になりながら、ひたすら走る。

謎の化け物との戦闘開始から約五分。もはや、決着はついたも同然だった。

無論、

「だああああっ!!」

俺の敗北である。

「死ぬ。マジで死ぬ!! 三途の川で死ぬとどうなるんだ!?! その場で靈魂抜けんのか!?!」

下らないことを叫ぶ俺に対し、のっぺらぼうの化け物は大きく拳を振り下ろす。

何とかかんとかその攻撃を避け、飛び散る砂利に顔をしかめながら、それでも前に踏み込む。

狙いは、隙の出来たその巨大な腕だ。

「こなくそおおっ!!」

ぼやけた輪郭の割に重たい感触に苛立ちながら、全力で刀を振り抜く。

決して、浅くない刀傷が化け物の腕に刻まれた。

血の替わりに、黒い障気のようなものが噴き出す。

「ぐっ」

“何度も”、見た光景だ。

——オオオオオオオオオオ

化け物が、長いトンネルで響く空洞音のような悲鳴をあげる。直後、黒い障気は消え、傷は綺麗に消え去っていた。

「…………ちくしょう。物理は効きませんか？もう絶望的すぎて、笑えてきたわ」

言葉とは裏腹に、涙目で顔をしかめながら柄を握りしめる。

斬る以外の攻撃方法は無い。霊夢のように霊力は使えない。魔理

沙のように魔法も使えない。
打つ手が無い。

「能力を止めれば……………」

常時発動状態だから、逆に意識しないと止められない自分の能力。
それを解除すれば、名も分らない（正確には忘れとしまった）この
刀の力が解放される。

ただし、自分の理性も確実に吹き飛ぶ。即ち、

「中有の道の屋台が終わるな」

ちなみに、中有の道の屋台は地獄が経営してるそうだ。

さて、地獄に喧嘩を売って尚、俺は生き残れるのだろうか。

答えは、否である。

（じゃあ、どうするよ……………」

考えながら、降り注ぐ拳をかわす。その隙について懷に走り込み、
思い切り足を切り裂いた。

グラリと化け物が傾くが、ものの数秒で持ち直した。

「……………」

ふと、小町の言葉が脳裏によぎった。

『落ちたが最後、死んでも上がってこれないからね』

三途の川を見る。透き通っているのに、何故か全く底の見えない
不思議川。

その見えない川底に、勝機を見た。
正体すら分からない化け物の拳をかわして、切っ先を相手に向ける。

「…………よし、反撃といこうか化け物。小町の仇は、とらせてもら
うぜ」

そう言って、俺は川岸ギリギリまで走り込んでいく。

文字通り、背水の陣を敷く。眼前に、化け物が立つ。

「ふう……………」

呼吸を整え、意識を落ち着かせる。

「……………来い!!」

化け物が、拳を振り上げた。
しかし、退がることはできない。それならば、

「う、おおおおおっ!!」

前へ走り込む。

姿勢を低くし、拳をギリギリでかわす。頭上を掠めていく感覚に
寒気を覚えながらも、滑り込むように足元へ辿り着いた。

「があ、あああああああ!!」

一閃。

獣のように吠えながら、化け物の右足の後ろを限界まで切り裂く。そのまま振り抜き、勢いを殺さないように足を運んで、左足へ更に一閃。

直後、両足の後方から、勢い良く障気が吹き出る。

——オオオオオオオオオオ

化け物が吠えながら、前のめりに倒れ始める。

早くも傷は塞がったが、完全にバランスを崩した化け物はそのまま倒れていく。

そして、

「……………テメエには、水底が似合いた」

化け物は大きく水しぶきを上げて、頭から三途の川へと落ちた。



「ぐっ。はあはあ……………」

唾を飲み込み、息を切らす。尻餅をついて、刀を手放す。

「ふ、ふふ……………」

ヤバイ。キマった。超格好良くキマった。

妖怪と出くわすこと十数回、妖精にイタズラされること数十回、マスパを撃たれる&御札を投げられること、共に測定不能。歯を食いしばり、必死に鍛錬した日々が報われ、

「祝☆人外戦、初勝利!!」

プラトーンのポーズを決め、声高らかに叫ぶ。
散っていった小町もきつと、祝福していることだろう。

――バシャ

「…………え？」

水音が、響いた。

冷や汗がたらりと、額を流れる。

腰を更にのけぞらせて、背後を見る。

そこには、

――オオオオオオオオオオ

化け物が川から這い上がってきていた。

「…………嘘？」

光景を否定しつつも、身体は素直に刀を拾って構え直す。

しかし、頭はついてこない。絶望に呑み込まれた思考回路は、まともに働かない。

化け物が拳を振り上げる。

(…………ええい!! こうなりや!!)

目の前に迫る拳に、自棄になりながら能力を解除しようとして、

――ズン!!

突然、化け物の腕が斬り飛ばされた。

「やれやれ。剣士としちゃ、四分の一人前以下ってところかね。妖忌のジジイの駆け出し時代を思い出したよ」

ジャリ、と砂利を踏みしめる音がする。同時に目の前に現れる、赤髪ツインテールの女性。

彼女は、

「小町っ!?!」

「まあよく頑張った。おかげであたいも、鎌を見つけれたらからね。いやはや焦ったよ。置いた場所忘れちゃってさ」

暢気に笑いかけてくるその顔は、間違いなく小野塚小町本人だった。

「あれ、おまつ、死んだんじゃ…………?」

「ははは。たかが、“悪霊”一匹にやられるようじゃ、“死神”稼業はやってけないさ」

「しに、がみ…………?」

彼女の右手を見る。そこには、巨大な鎌が握られていた。

「さて、アンタ。地獄の責め苦が嫌で隠れていたってのは、許してやる。百歩譲って私を襲ったのも許す。だけど、」

空気が、変わる。

バチバチと、強い力が弾けるのを感じた。

（小町、なのか………？）

悪霊と相對する、その後ろ姿にあの暢気な面影は感じられない。

「生者に手を出したのは頂けない。これでアンタの持ち金は零に果てしなく近くなった。………どういふことか、分かるかい？」

——オオオオオオオオオオ

目障りだと言わんばかりに、悪霊が拳を振り下ろす。
だが、

「アンタは悪行を重ね過ぎた。地獄の責め苦は、アンタの想像を絶するものになったってことさ」

悪霊の拳は届かない。

まるでそこに無限の距離があるかのように、拳は全く届かない。
届く気がしない。

小町が大鎌を振りかぶる。

だが、遠い。いくら大きくても、そこは得物の間合いではない。
しかし、

「さあ、舟で待ってな。まずは、永い船旅と洒落込もうじゃないか」

死神の一閃に、間合いという概念は無かった。

振り下ろされた刃は、完璧に悪霊を一刀両断した。直後、障気が爆発のように噴き出し、悪霊が動かなくなる。

最後に小町は手をかざし、次の瞬間には悪霊は消えていた。



悪霊の消えた河原にて。

大きな岩に腰掛ける小町に、一人の霊が寄ってきた。そして、霊は持っていた袋を小町に見せつける。

「おおー。アンタ、結構持つてるね。随分善行を積んだらしい。あつちで待ってな。あたいもすぐに行くから」

物言わぬ霊に、小町は暢気な笑顔でそう告げる。

霊はぺこりと頭を下げると、去っていった。

「小町が死神、ね」

「そう、あたいは死神様なのさ。驚いたかい？」

「イメージと違う」

「…………そりゃ、悪かったねえ」

笑いながら言う小町に、ため息をつく。

死神。それは色んな仕事のある神様で、小町は三途の川の渡し舟

の船頭をやってるそうだ。

そして彼女、滅茶苦茶強い。あんだけ俺が必死に闘った悪霊を、余裕で瞬殺である。正確には、殺してないらしいけど。

ポリポリと頭をかいて、もう一つため息をつく。今の俺は、少し元気が無い。

理由は、弱い自分情けないのが一つ。

そして、ここで暫く過ごして、“三途の川に来た目的は果たせない”ことを悟ったからだ。

「死んでここに來た奴は、生前の記憶がほとんど無い。オマケに、口も利けない。屋台の奴らは特例さ。模範囚としてのね」

唐突に、小町が口を開いた。そしてその内容は、俺が気づいたことと同一だった。

「駄目押しに、長く渡しをやってる死神でもなきや、霊を見分けることすらままならない」

「……………みたいだな」

そこまで聞いて、確信した。小町は俺がここに來た目的をもう解っている、と。

ならば、もう隠す必要も無いだろう。

「これじゃ、死んじまった家族に別れなんて、言えるハズもないよな」

俺は自嘲気味に笑いながら、ここに來た目的を言った。

「それにしても、神様っていうのは、基本的に人の心が読めるものなのか？」

「あたいのは経験則さ。稀にいるんだよ、アンタみたいな奴」

「へえ」

軽い返事を返して、ぼんやりと眺めていた三途の川から視線を外す。

「……………家族の死に目に、会えなかったのかい？」

「まあな」

「葬式は？」

「一応出たらしいけど、よく覚えてねえんだ。気が動転しててさ」

「墓参りは？」

「……………行けてない。行く前に“こっち”に来ちゃった」

「やっぱりアンタ、外の人間か」

「そう。外から来た人間さ。おどろいた？」

「イメージと違うなあ」

「そりゃ、悪かったな」

意趣返しに積もりなのか、馬鹿にするように言ってくる小町に苦笑を返す。

そうしてから、歩き出した。

もう目的は果たせない。なら、特にここに居る意味も無い。

「帰るのかい？」

「ああ、世話になった」

岩に座った小町の横を通り過ぎて、三途の川を後にする。

「祈ることさ」

後ろから、声がした。

「真摯な思いは必ずあの世にも届く」

「……………嘘じゃねえだろうな」

「あたいは死神さ。魂を侮辱するような嘘は、絶対につかない」

彼女の雰囲気にとぐわない、とても真剣な言葉。

しかし振り向かずとも、小町が暢気な笑みを浮かべてるのは、何となく分かった。

「大事な人間の冥福を祈ること、それがアンタに出来る善行さ」
「……………、」

空を見上げ、目を瞑る。そうしてから、“祈った”。

「……………ありがとな」

「何、こっちも久々に四季様以外と会話ができて楽しかったよ。また会おう、守彦。今度は人里の茶屋辺りで、のんびりとさ」

「……………いいね。今度は、明るい話題を持って行くわ」

適当に手を振りながら、テクテクと歩き出す。

目的は果たせなかったが、三途の川に来て良かった。そんなことを思いながら、俺も暢気な笑みを浮かべた。



「で、結局アイツは迎えに来ないのな」

日の暮れかけた頃。妖怪の山の麓を全力疾走しながら、一人愚痴る。

待ち合わせ時間を決めておくべきだったな、と後悔した。そして、背後から響く獣の唸り声に、更に後悔を深める。

立ち止まって、恐る恐る後ろを見れば、

「……………今朝は、よくもやってくれましたね」

行きに魔理沙が轢き逃げした、あの白髪獣耳の妖怪少女が立っていた。両腕に、盾と剣を構えて。

（小町。もしかしたら、今日中にお前の舟に乗るかも分からん）

友人との早い再会の予感と恐怖に、胸を高鳴らせながら全力疾走を再開する。

「あ、コラ!!! 待てえっ!!!」

「だあああ!!! 来るな、冤罪だあ!!!」



「うううん」

大きく伸びをして、小野塚小町は寝そべっていた大岩から立ち上がる。

今日も今日とて、サボリに勤しんだ彼女はほとんど仕事をしていない。

「さて！」

なので、彼女は気合いを入れ直すように声を出し、

「今日はもう帰って寝よう！」

声高らかに、そう宣言した。流石、貫禄のサボタージュである。しかし、

「そんなことが許されるとも………？」
「っ!？」

世の中は、彼女に対してそんなに甘くは無い。

背後から聞こえた声に肩をビクリと震わせて、小町はゆっくりと振り返る。

そこにはやはり、小さな女の子が立っていた。しかし、見た目とは裏腹に、この少女が小町の上司である。

彼女は閻魔の四季映姫・ヤマザナドゥ、幻想郷の最高裁判長である。

「性懲りも無くまたサボって!! 何か言うことはありますか!？」
「……………すみません」

小町は既に正座をして頭を垂れている。そんな彼女に、映姫は呆れたように深くため息をついた。

(ああ、また説教か……………)

諦めたように小町は腹を括る。

だが、何時もならすぐに始まる説教が、今日はなかなか始まらない。

はて、と小町が頭を上げると、映姫は何かを探すようにキョロキョロしていた。幼い容姿と相まって、非常に可愛らしい仕草である。

「あの、四季様？」

「何ですか、小町？」

「何をお探しで？」

「ええ、外から来た人間が来ていると、部下に聞きましたね。外は俗にまみれていますから、この機会に生き方を正してあげようかと思っただけですよ」

(……………何という有り難迷惑)

小町は苦笑しながら、狭野の強運を羨んだ。

ちなみに、その強運な狭野は現在、とある白狼天狗に追い回されていたりする。

「一足、遅かったようですね。残念です」

「ははは。残念でしたねえ、本当に。四季様の説教を聞けないなんて、人生の半分を損していますよ」

とりあえずゴマをすってみて、小町は説教を回避しようと画策する。

しかし、それも虚しく映姫の表情は険しくなり、裏目に出たかと小町は後悔する。

「……………小町」

「は、はい!!」

映姫の鋭い目が小町を貫き、小町の顔が恐怖で固まる。
だが、

「今日、外の人間が来た以外に、何かありましたか……………?」

「え? えっと、長いこと隠れて、悪霊化した奴が現れたぐらいですけど……………」

「悪霊、ですか……………」

映姫は小町から視線を外し、先程見ていた場所を見直す。小町もそれに倣って視線を動かすが、そこには何もない。

「さて小町」

「え?……………きゃんっ!!」

呆けた顔で首を傾げる小町に、悔悟棒が振り下ろされる。

すっかり油断していた小町に対し、映姫は唐突に説教を開始した。

「ほったらかしにした霊が、悪霊になったそうですね」

「うっ!?! い、いやあの……………」

「言い訳は結構。大体、アナタはいつもいつも————、

小町曰わく、その日は映姫様の説教に何時もの覇気が無く、何時もより早く終わったそうだ。

伍ノ太刀 一ゆらりゆられて三途の川一（後書き）

小野塚小町さんが登場。他にも二人かちよこつと登場。

こまっちゃんのキャラ、良いですね。何かカッコイイ。

対して、ダサイ主人公。彼の基本性能は、滅茶苦茶低いです。
1ボス以下ですね。

さてさて、あと一話挟んで紅魔郷にいけるかなあ？

陸ノ太刀 一 毎週火曜は特売日二

「あ」

あくる日の昼時、霊夢が呆けた声を出した。隣で、ぼんやりとまな板や野菜を洗っていた俺は、首を傾げながら彼女を見やる。

霊夢の表情は真剣そのもので、何だ、と聞くのも憚られた。

何か、あったのだろう。

彼女は非常に勘が良い。突然飛んでいったと思えば、妖怪から人里の子供を守り、戦闘時にもその勘の良さで敵の攻撃を先読みする。そんな彼女が、明らかな焦りを見せている。何かがあったのだ、俺はそう確信した。

そして、霊夢はとても悔しそうに眉尻を下げ、その苦痛を隠そうともせずに声を出す。

「……一味が、きれてたわ」

「だからどうした」

霊夢の勘は大概当たるが、俺の勘は滅多に当たらない。そんなことを再確認した今日の昼飯は、おうどんです。



「ゼエ、ゼエ」

例に及ばず、俺は道無き道を駆け抜けていた。今日の目的地は、香霖堂なる場所である。

『ここに行って、一味貰ってきて』

そう言いながら渡されたアバウトな地図には、魔法の森と人里ぐらいしか目印が無い。

こんな地図でも、目的地に着ける俺は凄い。そして、迷う訳でも無いのに、二回に一回は妖怪や妖精に絡まれる俺はもっと凄い。

(……………引きこもりてえ)

だが、そんな願いは叶わない。そんなことをしてたら、家主様に追い出される。

というか、一味ぐらい無くても良いじゃないか。というツツコミも無しだ。

口答えは許されない。分かっているだろう。

「俺、ここまで言いなりになる必要あるのかなあ……………」

走りながら、ふとそんな言葉を零す。

まあ、色々あって、霊夢や魔理沙には頭が上がらないのは確かだ。だが、神社に住むことを強制されている訳ではない。慧音さんに頼みこめば、人里での暮らしもどうにかなるだろう。

前に慧音さんに言った様に勝手に決めるのは抵抗がある。あるにはあるが、絶対的なものではない。

それにも関わらず、俺がああ博麗神社になあなあと長々居座る理由は何だろう。

脳内で自問。脳内に浮かぶ答えは、

「…………俺、Mなんじゃね？」

自分で言っておいてアレだが、しばらく頭を抱えてうずくまった。



「ま、まあ、出てけとか言われなから、まだいるだけで、別に、出てけと言われれば、すぐに出て行くし、そんな俺が命令されて喜んで、…………ん？」

自分に言い訳しながら走っていると、前方に禍々しい気配を放つ森が見えてきた。そして、その手前に建つ、一件の店。

その店の扉の上に掲げられている、『香霖堂』と書かれた看板を見て、俺はようやく足を緩めた。

目的地、到着である。

「はぁ。しかし、背景が禍々しいな」

背後の森に目をやると、気配どころか視覚的に障気っぽいのが噴き出てる。香霖『堂』というからには店なのだろうが、この立地では人も寄り付きそうにない。

霊夢直々の紹介な訳だが、類は友を呼ぶとの諺の通り、この店の

店主も変わり者なのだろうか。

「そういえば、魔理沙も確かこの森に住んでるんだっけか？流石、良い趣味してやがる」

「ふふん。なかなかお前も見目がついてきたな」

「……噂をすれば何とやら、か」

背後を見る。

そこにはお馴染みの白黒魔法使いが箒に跨っていた。

「よう、魔理沙。何か用か？」

「それはこっちのセリフだぜ。香霖に何か用か？」

「コーリン？ああ、この店の店主か。俺はまあ、何時も通りのお使いだよ」

「へえ、香霖とここで買い物か。何を買うんだ？」

「一味」

「香霖の顰めっ面が目には浮かんだぜ」

「……………うん？」

どういことだろうか。

一味を買う店な訳だから、てっきり香辛料か調味料の専門店か何かだと思っていたのだが。

「まあ、中に入れば疑問は解けるぜ」
「ん？」

顎に手を当てて、ぼんやりしていた俺を置いて、魔理沙は香霖堂に入ってしまった。

「…………まあ、それもそうだな」

少し間を置いて、俺も香霖堂の戸を開けた。

「おや、いらっしゃい」

まず出迎えの言葉をかけてきたのは、眼鏡をかけた銀髪アホ毛の青年だ。おそらく彼が香霖こと、この店の店主だろう。

「香霖、アイツが前に私が言ってた、外から来た奴だ」

カウンターの向こうにいる店主に、先に入っていた霧雨魔理沙が語りかける。

すると、店主が驚いたように目を見開いて、食い入る様にこちらを見つめてきた。男にジロジロ見られるのは正直キツイが、口には出さない。

そんな中、

「あら、遅かったわね。相変わらず、のろのろと歩いてたのかしら」

店主と同じ服を着た、霊夢が現れた。

「え？」

呆けた声を出した。

双子、姉妹、そっくり、いや違う、紛うことなく博麗霊夢本人だ。おうどんを四つ乗せたおぼんを持った霊夢がそこにいた。

しかし、何故ここにいるのだろう。

「いやね、アンタが出てった後、巫女服が一着破れてたなあって思
い出したのよ。それで霖之助さんに修繕頼もうと思ったのよ」

俺の疑問を表情から汲み取ったのか、霊夢がカウンターにおうど
んの入った器を乗せながら、口を開いた。

「でも、アンタもう出てってるじゃない。まあそれなら、アンタも
ここに来るし、ここでおうどん作っちゃおうかと」

「お前の思考回路はおかしい」

「あら、心配しなくても、アンタの分もあるわよ」

「そういうことじゃない」

片手で頭をかきむしって、大きくため息を吐く。

それなりに長い付き合いだが、コイツの考えは一向に読めない。

「ところで、霊夢。僕は台所を使っていいと言ったが、僕の服を着
ていいとは言ってないぞ」

「あら、霖之助さんは私に下着でいろって言うのかしら」

「言わないよ。というか、うどんなの材料はちゃんと持ってきたのに
代えの服は持ってこないのかい」

「持ってこないわね」

「……………そうか」

カウンターに着いて、頼杖をつきながらため息をつく店主。
なんだろう。一言も言葉をかわしてないのに親近感が沸いた。



小さなテーブルと椅子を出して、そこに座ってうどんを啜る。
すると、唐突に自己紹介が始まった。

「さて、初めましてだね。僕は森近霖之助だ。この道具屋、『香霖堂』の店主をやっている」

「あ、っと。狭野守彦です。博麗神社に居候させて貰ってます」

「そして無職だぜ」

「無職はテメェもだろ」

「私は魔法使いだ」

「なら、俺もフリーターだ」

「ふりーたー？」

聞き慣れない言葉に首を傾げる魔理沙。

だが、意味は教えない。分からないまま悶々とするがいい。

したり顔で魔理沙を見ると、彼女はむくれて食事を再開した。

「ふむ。僕達が聞き慣れない言葉を自然に出して来る辺り、君が外から来たのは本当らしいね」

「何だよ香霖。信じてなかったのか？」

「魔理沙の話を全部鵜呑みにしてたら、生きていけないわよ」

「全くだな」

「むう………」

俺が霊夢の言葉に同意すると、魔理沙は頬を膨らませておうどんにがつついた。

その様は見た目相応に可愛らしくある。だが、笑顔で毒キノコを平然と勧める彼女の言うことはやはり信じられない。

（廁とお友達になったあの日は忘れねえ）

まあ、霊夢も霊夢で、俺に毒味をさせていやがったのだが。

ふと食事中に惨劇の詳細を思いだしそうになって、慌てて頭を振って忘れる。

そんな俺の様子に首を傾げながらも、霖之助さんが口を開いた。そこから出てきた声色には、どこか期待が感じ取れる。

「なあ、守彦君？確認するようで悪いんだが、君は外から来たんだね？」

「うん？まあ、そうですね。確かに、幻想郷の外から来ましたよ。未だに実感は沸かないんですが」

「そうか」

そう答えると、霖之助さんはやたらと目を輝かせた。何か、新しい玩具を手にした少年のようだ。

まあ、彼が何故そんな眼をするのか、大体想像はついている。俺は店を見渡して、彼に尋ねた。

「んー。じゃあ、質問を返す様で悪いんですけど、一つ聞いていいですか？」

「何だい？」

「ここは、何を売る店ですか？」

言いながら、俺は店内の商品を見渡す。

そこには、提灯や掛け軸に混じって、灯油ストーブや地球儀、さ

らにはパソコンまで置いてあった。

人里の文明レベルを見るからに、明らかに“幻想郷には有り得ない”物が幾つも置いてある。

そして、質問を受けた霖之助は、どこか自慢するように口角を上げ、口を開いた。

「言っただろう？ここは道具屋さ。まあ、ここにあるのはタダの道具だけじゃなく、“外の道具”もあるがね」



霖之助さん曰わく、彼は無縁塚に流れ着く外の道具を拾い、それを商品として売っているそうだ。

しかし、外の道具なんて、使い方どころか名前すら分からない。

それでは、外では道具でもここではタダのガラクタになってしまう。

だが、そんな条理はこの森近霖之助には通じない。

何故なら、

「道具の名前と用途が判る程度の能力ね」

「そう。それが僕の能力さ」

ほんの少し誇らしげに語る彼に、俺は苦笑しながら頷く。

「正しく、道具屋の為の能力だな」

「ああ、おかげで僕も、これが天職だと思っているよ」

「営業は上手くいって無いけどな」

「……誰かさんがツケを溜め込んで、誰かさんが勝手に商品を持ち出すからな」

「言われてるぜ、霊夢」

「アンタのことでしょ」

「どうせ、二人共だろ。迷惑かけてる自覚がないのは、ホント救え、がっ!？」

言った途端、箸が二本額に飛来した。

「この二人に何か愚痴を言う時は、なるべくオブラートに言う方がいい」

「忠告どうも」

赤くなったであろう額を涙目で抑えながら、俺はため息をついた。そういう忠告は、もっと早く言ってほしかった。



食事が終わり、霊夢が器を片付け、魔理沙が我が家のごとくくつろぎながら本を開く。

そんな様子を確認してから、俺は口を開いた。これなら、会話に横槍が入ることも無さそうだ。

「さて、霖之助さん。外のどんな話が聞きたいんですか？」

「おや、僕は君の話を聞きたいなんて言っていないよ」

「じゃあ、そんなにキラキラと少年みたいに目を輝かせないでくだ

さい」

「……………すまない。僕は好奇心に正直なんだ」

「さいですか」

苦笑しながら肩を竦めつつ、俺はふと霖之助さんの心境を考える。流れ着く外の道具。能力で理解できるその名称と用途。

そしてそこから推測できる、“外の世界の光景”。なるほど。何となく納得できた。

幻想郷は外の世界の文明の発展から、意図的に乖離させられている。

それは文明の発展によって、夜の闇は消え妖怪はいないものとされたかららしい。

いないとされた妖怪は、存在できない。だからこそ、妖怪を認める地、幻想郷が必要となったそうだ。

つまり、幻想郷の者にとって外の世界とは、文字通り、別世界なのだろう。

霖之助さんは、能力故に外の世界について推測ができる分、その別世界への憧れが大きいのもかもしれない。

そこまで考えて、

(……………まあ、そんなに大した場所でも無いけどなあ)

ついこの間まで、その別世界にいた俺は苦笑せざるをえなかった。

「……………さて、それじゃ改めて、どんな話が聞きたいんですか？」

「そうだね。幾つもあるが、まずはこのパソコンとやらの使い方を

――――



霖之助さんは、能力で道具の名前と用途は分かるが、使い方までは分からないそうだ。

なので、詳しい使い方の分からない道具の使い方を説明していた。だが、とある道具が出てきたことにより、話題はその道具に集中している。

「…………なるほど、コイツも電気で動くのか。電気は何かならな
いものかな？」

「そうですね…………。発電機があつてとしても、燃料がありません
しね。そもそも充電器ありません」

「エネルギーが要るなら、私の魔法で代用とかはダメなのか？ 熱な
ら幾らでも出せるぜ」

「…………やめてくれ。俺の携帯が吹っ飛ぶ様なんて見たくない」

現在、カウンターのの上に置かれているのは、俺の携帯電話だ。

久々に見たマイセルフォンは、傷だらけになり、体力が尽きながらも生きていた。

何でも、飽きた魔理沙が香霖堂に売ったそうだ。

（…………まったく、人の物を質流しにするとはどういう神経してや
がんだ？）

そんなことを思いながら、魔理沙をジト目で睨んでみる。だが、

彼女はそんな視線に気づかずに携帯電話にキラキラとした眼を向けていた。

何時の日か、交換条件に携帯電話の使い方を聞いてきたぐらいだ。霖之助さん程ではなくとも、彼女の好奇心も大したものなのだろう。

ふと、霖之助さんと魔理沙が目を輝かせて携帯電話を見詰める光景が目映った。

(…………類友、いや兄と妹か?)

携帯電話が動くなら写メでも撮りたいなくなる程良い画で、

俺はつい妹のことを思い出した。

「……………」

「守彦君？」

「ふへっ!?! はい、はいはい何ですか!?!」

「…………何いきなりキョドってんだ？」

「ああいや、何でもない。何でもない」

いけないいけない。

つい感傷に浸ってしまった。勝手に独り湿っぽい空気を出すようでは、KYにかなり得ない。

俺は努めて冷静に、すぐに調子を元に戻した。

「それで、何の話でしたっけ？」

「いや、どうやらコイツは、今のところ手の打ち用が無いみたいだからね。とりあえず、君に返そうと思ったんだ」

「えっ!？」

呆けた声を出したのは、俺では無く魔理沙だった。

「香霖が、無条件で商品を誰かに渡すなんて……………」

「君は無断で持ち出すじゃないか」

「私は借りてるだけだぜ」

そんな会話を聞いて、俺は思い出した。

魔理沙は霖之助さんに携帯電話を渡したのではなく、売ったのだ。
ならば、今の所有者は霖之助さんである。

(……………あれ?盗品の売買って、所有権どこに行くんだ?)

そんなことを考えながら首を傾げていると、霖之助さんは苦笑しながら答えた。

「何、色々話を聞かせてくれた礼だよ。それで納得できないなら、
魔理沙のツケに加えておくさ」

「おい」

「じゃあそれで」

「おい!」

「よし、分かった」

「おい!!」

腕を振り回して抗議する魔理沙を見て、霖之助さんと一緒にクク
クと笑う。

何はともあれ、携帯電話が手元に戻ってきた。



結局、その後もダラダラと話が続き、夕飯も香霖堂で食べ、夜になっちゃった。

「魔理沙ー」

そんな時、玄関から霊夢の声が響いた。

さっきから姿が見えず、飽きて帰ってしまったのかもしれないと思っていたが、そんなことは無かったらしい。

「おーどうした霊夢。相手してもらえなくて寂しくなったのか？」

「違うわよ」

魔理沙のからかいを気にもかけず、霊夢はスタスタとカウンターに歩み寄りながら要件を伝えた。

「星、流れ始めてるわよ？」

「……………あー！？」

突然、大事なことを思い出した、と言わんばかりの声を上げる魔理沙。一瞬の硬直の後、彼女はすぐさま玄関から外に飛び出した。

「やれやれ」

「……………そうか。今日だったな。よく覚えてたな、霊夢」

「一週間前から言ってたもの。流星に覚えてるわ」

事情を理解しているらしい二人に置いて行かれ、俺は一人呆然とする。

「え？何事？」

そんな呟きに対して、霖之助さんは椅子を二つ持ち上げなら、

「まあ、外に出れば分かるよ」

と、それだけ返した。

「そういえばアンタ、ケータイとやらは動いたの？」

「今更その話題！？ホントマイペースだな、お前」

「別に良いじゃない。で、動いたの？」

「まあ、動かなかったな」

「根性無いわね」

「根性の問題じゃねえよ」

玄関に向かいながら、唐突に話題を振ってくる霊夢にツツコミを返す。

いつも通り過ぎる彼女に、ふとため息をついて、

「よく分かんないけど、外のことなら紫に頼んだら？」

「ゆかり……………」

「凄まじい力を持っている妖怪さ。彼女なら、幻想郷と外だって行き来できるんだ。まあだけど、あんまり彼女とは関わらない方が良いと思うよ」

「……………それもそうね」

「ふうん」

何かよく分からないまま、見知らぬ妖怪の話が終わる。

俺は色んな妖怪がいるんだな、程度の感想だけを持って玄関のドアを開けた。

そして、その数秒後。

「……………すっげえ」

そんな詰まらない感想は、一瞬で吹き飛んだ。

夜空を見上げると、星が流れ、また流れる。

幻想郷の夜空の美しさは元々外の比じゃなかったが、これはその上を行っている。

「流星群、か。すげえな。すげえとしか言えねえ」

「ははは。そうだろうそうだろう」

何故か自慢気に言う魔理沙は、携帯電話を見ていた時よりも目を輝かせ、流星の夜空に見入っている。

「やれやれ、こんなの何回も見ただしように」

呆れたように呟いて、霊夢は霖之助さんの持ってきた椅子に腰掛ける。そして、言う割には彼女も何だかんだで熱心に流星を眺め始めていた。

「ふっ」

そんな少女二人を見て小さく笑い、霖之助さんは椅子に腰掛けて本を開く。

(……………何ていうか)

彼らは全く血も繋がっていない他人らしいが、俺には彼らが随分仲のいい兄妹に見えて、少し羨ましかった。

「……………、」

夜空を見上げる。

とめどなく流れ続ける星空を、見せてやりたくなって携帯電話を構えた。

真っ暗なままのディスプレイを見ながらも、ボタンを押した。

――ピロリン

そんな無機質な電子音が聞こえた気がして、自嘲気味に笑う。

「まあ、また何時か土産話にでも……………」

そう呟きながら、携帯電話をポケットにしまう。

今日は、良い一日だった。

ちなみにその後、眠ってしまった霊夢を負ぶって博麗神社まで帰るハメになり、途中で霊夢に復讐戦を挑んできた妖怪に襲われ、三途の川以来の修羅場となるのだが、

今日は、良い一日だった。

その一言を守るために、これらは別の話ということにしておく。
というか、しておきたい。

陸ノ太刀 一毎週火曜は特売日一（後書き）

香霖堂の雰囲気、良いですよ。ほんと緩くて。

そして、あんな霖之助と霊夢と魔理沙の關係に憧れてます。

………本当に。ええ本当に。

あ、シスコンとかじゃないです。

次から紅魔ですか。

では、予告。

夏の幻想郷を覆い尽くす、紅い霧。

この異変を解決すべく、紅白の巫女と白黒の魔法使いと、厨二の少年。

基本無能な少年の愚考を、二人の少女は必死に引き留める。

「何で俺行くことになってんの！？お前らだけで十分だろ！？」

「そう。じゃあ、タダの穀潰しはいらないわね、この世に」

「おっ。丁度いいな。新種の茸を試したいと思ってたんだ」

「じゃあっ！！行くぞちくしょうっ！！！！！！」

少年の悲痛な覚悟を、少女達はタダ見守る。

厨二と異変が交差する時、物語は始まる………！！

ちなみに、予告はあくまで予告です。製品版とは違います。
ではまた、次回で。

漆ノ太刀 一紅霧と異変と鬼巫女と一

「さあ、始めようか」

大魔術の術式の中心に立ち、かの悪魔は高らかに笑う。笑いながら、悪魔は術式を起動した。

ついに始まる。否、もう始まった。

「……………全ての運命は、我が手中に」

引き裂くように口角を上げ、漆黒の翼が広がった。彼女の瞳はどこまでも楽しそうに愉しそうに歪む。その奥に、一つの覚悟を滲ませて。

かくして、異変が始まる。



蝉が鳴き始めた夏のある日のことだ。

幻想郷の外から来た少年、狭野守彦は人里の大工仕事を手伝いを終え、帰宅する途中だった。お給金を貰って飴を買い、それを舐めながら鼻歌混じりに暢気に歩いていく。

そんな平穏な帰り道、かの少年は足を止めざる得ない状況に襲わ

れた。

「な、何だこれ……………」

パタパタと団扇を扇いでいた右手が止まり、口が呆然と開きっぱなしになる。

しかし、今回は道中妖怪に襲われた訳でも、妖精に飴の入った袋を奪われたわけでも無い。

突如として、

「……………紅い、霧？」

幻想郷が紅い霧に包まれたのだ。

「……………ぐっ、嫌な予感しかない」

少年は当たって欲しく無い時だけ百発百中の自分の勘を呪いながら、神社に向かって走り出す。

関わりたくないが、関わるハメになる。そんな確信めいた予感を抱きながら。

そんな彼の腰に差された妖刀は、無機質な音を鳴らし続けている。



自称白黒の魔法使い、霧雨魔理沙は、幻想郷を覆う紅い霧を見な

がら、一人感心する。

「これほどの大魔術だ。どうやら、随分やり手の同業者がいるようだな」

彼女は箒をクルクル回しながら、ほんの一瞬悔しそうな顔をする。しかし、一瞬の後に彼女の顔にあったのは、いつも通りの彼女らしい笑みだ。

「これほどの技術、是非とも盗む、もとい学ぶべきだな」

手から離れた箒が宙に浮かび、彼女はそこに跨る。

直後、一気に紅色の空に向かって高度を上げ、凄まじい勢いで飛び出した。

「久々の異変だ。楽しまなきゃ損だぜ」

天真爛漫な笑顔を浮かべ、白黒の魔法使いは渦中へ自ら飛び込んでいく。

彼女が最初に目指すのは、無論あの神社だ。



「……………面倒臭い」

縁側で湯のみを持ちながら空を見上げ、博麗の巫女こと博麗霊夢

は眉間を寄せる。

確かに涼しくならないものかと先刻太陽を睨みつけたが、こんなのは望んでない。

「こんなことになったら、私が動かなきゃならないじゃない………」

博麗の巫女である以上、こんなに露骨な異変を見過ごす訳にもいかない。

個人的には見過ごしたいが、見過ごせないものは見過ごせないのだ。

「はぁ。まったく」

神社の前に立ち、お祓い棒でトントンと肩を叩く。

空を見上げれば、日が落ち月が出始めていた。今からだと妖怪退治は夜になる。

夜の妖怪は昼の妖怪よりも凶悪だ。

そんな当たり前の事実を頭の中で確認しつつ、彼女は少しだけニヤリと笑った。

「さて、何処ぞのバカをぶっ飛ばしに行きましょうか」

誰とも無しに語りかけるように霊夢が呟く。

すると、呼ばれたように少年が鳥居、魔法使いが夜空から、それぞれ現れた。

異変発生より程なくして、役者が揃う。

そして、異変解決が始まった。



霊夢曰わく、この紅霧のような異常事態を、異変と呼ぶらしい。
そして、博麗の巫女はこの異変の首謀者をブチのめして、異変を
解決しないとイケないらしい。

まあ厳密には、博麗の巫女がやらなきゃいけない訳ではないらしい。
例えば魔理沙なんて、当たり前のように異変に首を突っ込んで、
霊夢より先に解決することもあるそう。

ともかく、霊夢と魔理沙は今から、こんな異変を引き起こせるよ
うなトンデモ妖怪と一戦交えに行くらしい。
ならば俺は、

「祝勝会の準備しときゃなきゃな！任せとけ、腕によりをかけて旨
いもん作っとくベラッ!？」

颯爽と台所に駆ける俺の襟首を、霊夢の左手が掴んでいた。

霊夢が半眼で俺を睨め付け、呆れたように口を開く。

「アンタも行く、」

「いいいいやああだあああっ!!」

耳を塞いでガキみたいに叫ぶ。

嫌だ。聞きたくない。

霊夢が御札一枚で退治できる木っ端妖怪にすら、俺は未だに勝て
ないのだ。

なのに、こんなスケールの異変を起こす大妖怪と相対しようものなら、

(…………死!!)

物言わぬ肉塊エンド、確定である。

「はあ。相変わらずバカねえ」

「ば、バカじゃねえよ。臆病なだけだ。無謀は勇気と違うんだよ!」

命は投げ捨てるものではない。これぞ格言だ。

言いながら、なおも暴れる俺に対して、霊夢は呆れたように言葉を吐いた。

「一つ聞くわよ。幻想郷は何の為に作られたのかしら?」

「え? えっと、忘れ去られる妖怪が、消えてしまわないように、だっけ?」

「大体正解。じゃあ、幻想郷が無くなったら妖怪に未来はあるのかしら?」

「…………そりゃあ、無いだろ」

いきなりの質問責めに、俺は暴れるのを止めて考える。
そこでふと、あることに気づいた。

「あれ? この異変、何が目的なんだ?」

動機である。

こんな大事を起こしたにも関わらず、首謀者は幻想郷を征服する訳でも、もちろん滅亡させようともしない。
では何故、こんなことをしたのか。

「遊びなのよ」

「……………遊び？」

「堅く言えば、妖怪退治の変形よ。妖怪が暴れ、人がそれを止める。古臭いことだけれど、妖怪には必要なことなのよ」

「へえ……………」

興味深い話だ。妖怪と人間の変わらぬ関係というのを垣間見た感じがする。

「……………あれ？」

そこでふと気づく。

「ってことは、この異変、人間の勝利が確定してる？」

そう言うと、霊夢はニヤリと笑った。

「そう。そして、勝てば英雄よ？」

「おお、英雄」

「そう。得難い称号じゃあ無いかしら？」

「……………ううん。確かに」

人里のみんなにちやほやされる俺を想像する。悪くない。つていうか、憧れる。

更に、木っ端妖怪すら倒せない俺が、大妖怪を倒せるのだ。それは痛快である。

「じゃ、じゃあ」

腰に差した刀の柄を触りながら、緩んだ顔で同行しようと言おうとする。

だが、

「まあ、そんなに上手い話は無いけどな」

魔理沙の言葉の方が、早かった。

「どういう意味？」

「だって、お前考えても見ろよ。遊びでこんなことする奴が、そんな詰まらないやられ役なんてするか？」

「あ」

正論。まさしく、その通りである。

「それに、確かに異変は妖怪退治の風習から来てるところもあるが、今更そんなの気にする妖怪なんていないぜ？」

「え？いないの？」

「ああ、そんな真面目な妖怪は見たことがないな。それに、私が見てきた異変の黒幕は、何だかんだでそれぞれ目的を持ってたぜ」

何それ。全然話が違う。

そして、魔理沙の言う通りなら、

「まあ、そんな危険度零の遠足みたいにはならないし、容易く勝た

せてもらえるハズもない。ナメてかかれれば、一瞬で死ぬだろうな」
「やっぱ残るうううっ!!」

再び暴れる。しかし、拘束は解けない。

背後を見れば、チッ、余計なこと言いやがって、的な表情をした
霊夢がいた。

「つか、何で俺？ 必要ないじゃん。足手纏いじゃん！ 何で俺行く
感じになんの！？ お前ら二人で十分だろ!？」

必死の説得。もう涙目だ。

すると、霊夢は諦めたようにため息をついて、右手を顔の辺りに
上げる。

「仕方ないわね」

その言葉を待っていた。

思わず歓声をあげそうになって、

「全身血まみれにして適当に投げ捨てて、陽動に使いましょう」

「やああああ、ああああ あゝっ!？」

変な悲鳴を上げた。

右手一杯に針を構えた霊夢の眼は、マジである。本気と書いてマ
ジだ。

「おいおい待てよ霊夢」

「ま、魔理沙」

そこに待ったをかけてくれる魔理沙。
流石だ。信じてた。

「ここに丁度、新しく見つけた茸がある。多分、食べば発狂するタイプの毒だな。陽動なら、暴れ回った方がいいだろう」

「う、うわぁああああっ!!」

信じてた。うん、そういう奴だって。

そこでようやく思い出す。そうだ、今の俺に権利や自由なんて無いんだ。

しかし、現実を理解しても、針と毒茸を構えてにじり寄る悪魔達はどうにもならない。

もうどうしようも無い。俺は仕方なく、本当に仕方なく叫んだ。

「い、行く!! 俺も行くからテメェらこっち来んな来ないでお願い止めて下さい!!」

頭を抱えながら、そう叫んでしまった。

思わず瞑っていた眼を開けると、少し離れたところに二人が立っていた。

「男に二言は無いわよね?」

「そういうことだな。まあ、逃げんなよ」

二人はそれだけ言うと、地面を離れて飛んでいってしまった。

「……………ふう」

俺は額に輝く冷や汗を拭い、神社に戻ろうと歩き出す。

直後、足元に突き刺さる無数の針。

背筋に走る悪寒。前門の妖怪、後門の鬼巫女とはこのことか。

そして、俺はきっかり三秒逡巡し、

「うあああああつ！！ちくしょうっ！！行けば良いんだろ行けば！！？やったろうじゃねえか！！」

ヤケクソ気味にそう叫んで、霊夢達の後を追うように走り出した。その時、口に入ったしよっぱい何かは、きつと汗だ。

「ってか、走って付いて来ってか！？ふざけんなちくしょう！！」

最後の抵抗にそんなことを叫び。俺の初めて異変解決はスタートする。

漆ノ太刀 一紅霧と異変と鬼巫女と一（後書き）

以上、プロローグでした。

短くてすみませんね。本編と分けたかったんですよ。

脳内妄想が、もう無限宇宙化してますからね。膨らまし過ぎるのが恐いんですよ。

脳内妄想を如何に面白く書き出せるか、それが問題ですね。

自信ないなあ……………。

捌ノ太刀　―タイムリミットは不明―

「だぁー!! 鬱陶しいんだよ、テメェら!!」

異変で浮かれているのか、妖精達がやたらと荒れている。
なけなしの妖力を込めた弾丸を、ひっきりなしに撃ち込んでくる。
速くもなければ強くもないし、避けられないことも無い。
だが、滅茶苦茶鬱陶しいのだ。

「こ、の……………!!」

苛立ちながら刀に手をかけるが、幼い容姿の妖精を切り裂くのは
良心がヤバイ。妖精は自然の化身であり死ぬことが無いそうだが、
それでもキツイ。

「う、ぐぐ……………」

こちらが悩むのもお構い無しに、妖精共は妖弾を撒き散らす。
それをひたすら避けながら、全力で駆け抜ける。結局、刀は抜け
ずに、逃げ回ることしかできなかった。

「くっそお……………」

ふと遠くの空を見れば、閃光が瞬き、小さな爆発が連続して起こ
っている。

「…………あれぐらい、はっちゃけちまった方がいいのかな?」

それこそ正に、ゴミのように撃墜されては落ちていく妖精を眺め

ながらそう呟く。言うだけで、結局刀は抜かないのだが。

「……………ん？」

突然、霊夢の放つ結界の光が強くなる。何か厄介な相手にでも、出くわしたのだろうか。



夜風が頬を叩く。程よく涼しい気温のそれは、どこか心地いい。

されど、紅い霧の立ちこめる中爛々と輝く紅き月は、その心地良さを呑み込む程の不気味さを醸し出している。

それを踏まえて、私は率直な感想を言ってみる。

「気持ちいいわね」

もし魔理沙がいたら、ツッコまれるだろうか。まあ、今は一人なのだが。

アイツは数分前に私に“面倒”を押し付けて、さっさと先に行っ

てしまっている。

私もさっさと行きたいのだが、

「アンタ、誰？」

目の前の面倒は、面倒らしく、面倒臭くも未だに目の前に存在している。

本当に、面倒な奴だ。

「さつき会ったじゃない。あんた、もしかして鳥目？」

目の前の妖怪がそう言う。

その姿は、さつき私の封魔陣を喰らってボロボロだ。だが、その表情には変わりなく笑みがある。

余裕なのか、それとも笑顔以外を作れないのか。

まあ、どうでもいい。

「人は暗いところでは物が良く見えないのよ」

「あら？夜しか活動しない人も見たことある気がするわ」

「それは取って食べたりしてもいいのよ」

「そーなのかー」

そう言って、妖怪はスツと牙を見せるように笑った。

その眼に喜色が浮かぶ。ご馳走を目の前に出された子供のように。

「目の前が取って食べれる人類？」

溜め息をつく。

「良薬口に苦しって言葉知ってる？」

言うが早いのか、眼前に妖力を込めた閃光が迫る。

だが、遅い。

ひらりと避け、針を連続して投げる。

妖怪は慌てて避けようとして、あっさりと撃ち抜かれた。

清められた針は、妖怪にはさぞかし痛かろう。あれだけ喰らえば、もう動けるとも思えない。

（拍子抜けね）

素直な感想を頭の中で述べた。
その直後、

――バチン

弾けるような音が鳴った。

「……………」

途端に湧き出す、嫌な予感。私のこういう予感は、確実に当たる。
ならば、

「……………封魔陣」

予感と共に、徹底的に叩き潰しておくまでだ。

陣の放つ光が消え、妖怪が煙を上げて落ちていく。

「良薬っていつでも、飲んでみなけりゃ分かんないけどね」

そう吐き捨てて、さっさとその場を後にした。

霊夢は気づかない。

自分の叩き潰しそうとした予感潰れておらず、とある少年に丸投げされたということに。

まあ、気づいたところで、彼女は気にせず行ってしまっただろうが。



「…………嫌な予感かしねえ」

俺は知っている。

こういう予感に限り、確実に当たるということを。

少し前方に、落ちていった何かを思いながら、溜め息をつく。

「やっと追いついたと思ったら、目の前に落としやがって」

恨めしげに空を見上げるが、もうそこに紅白の姿は無い。どうやら、もう行ってしまったようだ。

（やべっ。置いてかれる…………、けど）

走り出そうとして、止まる。前方の木々を抜ければ、霊夢にやら

れただろう妖怪とご対面だ。

迂回しようか悩む。されど、放されてしまつては、追いつけなくなるかもしれない。

嫌な予感はまだにするが、流石に敗戦直後のボロボロ妖怪相手に瞬殺されることも無いだろう。

いざとなれば、この鍛えた逃げ足を披露すれば良い。

「よしっ」

俺は腹を括って、走り出した。

走り始めて数十秒、霊夢にやられたとおもしき妖怪はあっさりと見つかった。

「……………って、コイツは確か」

俯せに倒れ、ピクリとも動かない妖怪。

その妖怪はかつて、俺に妖怪という存在が如何に恐ろしいかを叩き込んだ、金髪少女姿の人喰い妖怪だった。

「よりによって、コイツかよ……………」

溜め息をついて、かつての恐怖の仕返しとばかりに半眼で妖怪を睨みつけてみる。しかし、得られたのは何とも言えない情けなさだけだった。

「死んでは……………、ないみたいだな」

ほんの少しだけピクリと動いた指先に、ほんの少し安堵する。妖怪は半端じゃない程タフだ。生きてさえいれば、どうにでもなるだろう。

「しかし、アイツらにかかればコイツもこの様か……」

ほんの少し前に、恐怖の対象として現れた妖怪。そんな妖怪の今の姿を見て、改めて霊夢や魔理沙と自分の格の違いを思い知らされた。

「……さっさと行くか」

何とも言えない悔しさを感じて、それを振り払うように走り出した。

走り出して、

――バチン

「？」

そんな音に足を止めた。

首を傾げると、背後からジャリ、と土を掴むような音が響く。

（おいおい、勘弁してくれよ……）

あの妖怪が目覚めたのだろうか。だとすれば、マズい。

(……………どうする?……………そういやアイツ頭弱そうだったな。また、言いくるめられないか?)

頭の中で出された案を採用し、言葉回しを考えながらゆっくりと振り向く。

数秒後、逃げるべきだったと後悔した。もっと言えば、迂回するべきだったと。

しかし、後悔先に立たずの言葉の通り、俺は妖怪と眼を合わせてしまった。

「……………夜に活動してる人だ。なら、取って食べてもいいよね」

笑顔。

這いつくばった状態で、頭だけを持ち上げて、土まみれの顔でその妖怪ははにかんだ。

――バチン

先程も聞こえたその音。その音と共に、頭の中で警鐘が鳴る。

何も言えない。言うことができない。

恐ろしい。何がかは分からない。だが、それ以外に何かを思うことができない。

まるで、何も見えない暗闇に吞み込まれたような、

「いただきます」

言葉。轟音。爆ぜる土。

突如、眼前に現れた妖怪は、腕を振り上げて――――、



眼を開ける。地面が映る。

木に背を預けるような形で、気を失っていたらしい。

「……………？か、」

何で、と言おうとして、何故か掠れたような息だけが漏れる。同時に、全身に電撃に撃たれたように痛みが走った。

「っ！？があは！？ああゝあゝ！！」

身体を抱くように悶えながら、思わず顔を上げる。

「あは」

映ったのは、爛々と輝く赤い瞳。振りかぶられた腕。

同時に、走馬灯のようにさっきまでの状況が情報となって頭を駆け巡る。そして、一緒に外にいた時の家族との記憶がよぎり――、

（……………って、マジもんの走馬灯じゃねえか！！）

脳内にツツコミながら、跳ねるように横に転がる。

直後、妖怪の放った腕が轟音を上げて、俺のもたれていた木をへ

し折った。

「~~~~っ!!」

背筋に走る凄まじい悪寒。それでも、手に持った刀の切っ先を向ける。

「あれ？」

何時の間に刀を抜いたのだろう。考えても、思い出せない。

だが、恐らく一撃目を反射的にこの刀で防いだのは予測できる。そして、防いだにも関わらず、ギシギシと軋む身体が妖怪の一撃の重さを教えてくれた。

「逃げないでよ。どうせ逃げられないんだから」

一言一言が処刑宣告のように聞こえて、恐怖に足が震えそうになる。虚勢を張る余裕も無い。

(…………殺される)

妖怪がおもむろに両手を広げた。

直後、世界が闇に包まれる。

「あははは」

「っ!!」

背後。

ようやく気づいた。

（……落ち着け、落ち着け落ち着け！！）

息を深く吸って、柄を握る感覚を確かめる。大丈夫だ。まだ俺は生きて、

「ナイトバード」

比喻でも何でもなく、心臓が止まった。

すぐ背後から聞こえた声に、振り向く間も無い。そのまま、俺は



「ゴボツ！」

久々に見た色は、血の赤と土の茶色だった。

四つん這いになって喉から這い上がってくる血に咽せながら、それでも俺は生きていた。まだ生きているのかと我ながら驚きながら、まだ終わらないのかと泣きたくなる。

「仕留めたと思ったのに」

「！！」

背後から響く声。

ひっくり返るように尻餅をついて、這うように後ろに下がる。しかし、すぐに木の幹に背中が当たった。

「……………嫌だ」

震える声で放った拒絶。しかし、気にかけることも無く、妖怪はこちらに歩み寄って来る。

ああ駄目だ。死ぬ。殺される。

――我が刃を以て全て斬り伏せよ

その時、頭に響いたのは懐かしい声。そして、二度と聞きたくなかった声だ。

（待て、待て待て待て待て！！）

この状況、こんな時に、いや、だからこそなのか。

額に冷や汗を浮かべながら刀を見やる。やはり、黒い靄が漏れ出してきていた。

俺の能力が弱まったのか、妖刀の力が強まったのか。それは分からない。

分からないが、マズい。

「と、止まれ！！」

「やーだよー」

「デメエじゃねえ！！」

「?」

首を傾げて怪訝な目でこちらを見やる妖怪と生命の危機すら無視し、ひたすら能力に集中する。無意識下でも抑えられたのだ、ならば――

「っ!?!ゴブツ!!げほっげほっ!!」

空気を読まずに喉から込み上げてくる血に、思わず咽せかえる。マズい。死ぬのはマズい。殺されるのもマズい。だが、殺すのはもっとマズい。

「止まれ、クソ、止まれ!!止まれ止まれ止まっ、!?!がつああ、あゝあゝあゝ!?!」

「あんた何を………――――」

音が消えた。残るのは、頭の中に響き渡る声だけだ。視界が狭まる。世界の色が白黒に染まっていく。

そして、身体に冷たくベトつく何かが絡み付き――――

――憎い。憎い。憎い。仇なす敵は、全て邪悪だ。

――敵に殺される。なら、殺さなければ。殺す。

――殺しに來たのだ。なら、殺していいだろう。邪が死ぬ。祓われる。

――浄化。救われる。もう死なない。だから殺す。

(…………ああ、もうダメだ。)

頭が割れる。痛みの比喻では無く思考的なところで、崩壊が始まった。

自失していた前回と違い、凄まじいまでの危機感が理性を襲う。だが、為す術は無い。

真っ暗闇に身を投げるように、意識を投げ出す。その、直前。

『情けないのう』

声が聞こえた。

二度と聞きたくなかった声とは違う。頼もしくも懐かしい、テンプレ的の老人口調。

『前を向いて生きていける？嘘っぱちじゃのう。じゃから、お主は弱いのじゃ』

(うっ、せえ)

『そんなことを言う余裕があるなら、根性見せてみんか。このへたれめ』

(言われなくても、)

目を見開く。身体を持ち上げる。口を大きく開ける。

逃げるな。目を背けるな。前を見ろ。突破口は、必ずある。

「や、っつだらあ、あ、あ、あ、あああああああああああああああ
あああああああああっ！！！！！」

全力で吼える。能力を必死の思いで行使した。
脳内に響いていた声が、消えた。



『十点じゃな。無論、百点満点で』

「……………あ？」

頭の中に響く声に、ようやく我に帰る。

『延命措置しか出来ぬようでは、意味も無かろう。そんな力押しで、
――――に勝てるはずも無し。お主、結局吞まれるぞ？』

「あー、なあ御都」

刀を軽く振る。黒い軌跡を残して、空を斬る音が鳴った。
あんなに痛めつけられ満身創痍だったハズの身体は、驚くほど楽
に動いた。いや、もはや軽いぐらいだ。

「話は後だ」

不意に刀を前に掲げる。

直後に、金属音。

「何？ さっきから一人でブツブツと、挙げ句の果てに変身？ あんた、
何なの？ おかしい人？」

「そうだな。俺は変わり者で見ての通りのゲテモノだ。だから食う

のは止めてくれ」

「偶にはゲテモノ食いも良いわね」

「……………そうかよっ!!」

「わっ」

妖怪の化け物染みた腕力を相手に、一步も退かずに押し返す。夢でも見てるような感じがするが、呆けてる場合ではない。

「……………ムーンライトレイ」

妖怪の両手から俺の脇を挟むようにレーザーが放たれる。妖怪はニヤリと笑いながら、間隔を狭めるように両手を動かした。

「っ」

「ゲテモノなら、しっかり焼いた方が良いのかしらね？」

「臭みが増すから止めとけ」

「あら、臭いものほど美味しいよ？」

どうやら、この妖怪にとって俺は食料確定らしい。説得は不可能だ。

（じゃあ、どうするよ？）

こちらの反応を楽しむ為か、妖怪はゆっくりと腕を動かしている。だが、余裕がある訳でもない。

（屈むか、突っ込むか、手傷覚悟で横に飛ぶか）

策を頭の中に巡らしては、撃ち抜かれて転がる俺の姿が浮かんた。その姿に沸騰していた頭が冷え、吹っ飛んでいた恐怖が蘇る。

『馬鹿者』

ほんの少し足が震えてきたと同時に、御都の声が響く。

『上ががら空きじゃろうが』

言われて、頭を上げる。木々に切り取られた夜空が見えた。
その瞬間、“思い出す”。

「…………なるほど」

思い切り、地を蹴った。



晩御飯が跳ねた。食料にしては、とても高く。

だが、わたしは知っている。

さっきの巫女みたいな例外を除いて、食料は長く宙にいられないことを。

だから、わたしは焦らずに両腕を合わせて、待っていればいいのだ。それだけで、落ちてきた食料は自分から料理になってくれるはずだ。

「……………」

あれ。おかしいな。落ちてこない。

首を傾げてみても、晩御飯は地面に戻ってきてくれない。

「やっぱお前バカだな」

代わりに降ってきたのは、わたしをバカにした言葉と、

「まあ、もう一回寝てろ」

黒い何かだった。

「痛っ!!」

思わず叫ぶ。肩を見ると、血が吹き出ていた。

さっきの黒い何かのせいだ。

上を見上げれば、気味の悪い翼を生やした食料が宙に飛んでいた。どうやらあの食料は、例外だったらしい。

とにかく、今のはアイツがやったに違いない。

――バチン!!

さっきから頭が痛いのに、お腹が空いてるというのに。

食料のクセに、食料の分際で、食料風情が。

「…………喰い殺してやる!!」

思い切り地面を蹴飛ばす。同時に、頭の中で何かが切れる音がした。



「あれー？」

衝撃波的な感じのを飛ばして吹き飛ばすハズが、モロ斬撃のまま飛んでいってしまい、正直テンパっていた。

数秒程呆けて、すぐに気を引き締め直して刀を構える。

直後に響く金属音。火花の向こうの顔を見れば、やはりというかマジギレしてる。

押されるがままに高く飛んでいくと、林を上を抜けて夜空の中に飛び出した。紅く輝く満月が妖しい雰囲気を出すが、気にかかる余裕は無い。

「そう怒るなって、先に手を出したの、」

「ムーンライトレイ！！」

「おいっ！！」

こちらの言葉に聞く耳も持たず、零距离からの攻撃。刃に触れた掌から、溢れるように光が流れ出す。

空中で踏ん張るのは不可能だ。俺は衝撃に押されるまま、文字通り回転しながら吹き飛んだ。

「つつああっ！？」

空を飛んだ経験なんてほとんど無い。掠れた記憶に従って何とな

く似よう似真似でやってる俺に、空中で体勢の立て直し何て出来るはずもない。

グルグル回る視界の中で、必死に翼をばたつかせながら目の前に迫る木々に冷や汗を流す。何時の間にやら落下軌道に移っていたようだ。

来るべき衝撃に備え、ギュツと目を瞑った。

――一念じよ。されば、我は応えん。

「っ!?!」

突然頭に響く、御都とは違う声。

抑えきれていなかったことに焦りを覚えつつも、俺はその声に従った。

「止まれっ!!」

叫ぶと同時、翼が勝手に細かく羽ばたいた。すると回転がピタリと止まり、ゆっくりと木の頂点に降下した。

「…………クソ」

痛い思いをせずに済んだことより、あの声が止んでいないことに焦燥する。

どうやら御都の言う通り、もう吞まれるのは確定のようだ。それなら、仕方がない。俺は、諦めたように溜め息をついた。

「もう待てないわ。お腹と背中がくっつきそう。いい加減、くたば

りなさい!!」

空を見上げる。

巨大な闇の球体が、月を覆うように浮遊している。

「ディマーケーション!!」

そこから、全方位に妖弾が放たれた。

正直、避けられる気がしない。俺には壁が迫ってくるようにしか見えないし。

（霊夢なら、上手く避けるんだろうなあ）

そんなことを考えながら、矢を引くように刀を引いて構える。切っ先は、闇の球体のド真ん中に向けて。

「悪いな。ちよいと、急がないといけなくなった。終わらせるぞ」

溜め息混じりにそう告げる。同時に、眼前に魔法陣が出現した。記憶の欠片に従ってかなり適当にやってみたが、どうにかなった。ありがたい話である。

魔理沙は、きつと怒るだろうけれど。

「いくぜ!! 真似技・イミテーションスパーク!!」

刀を魔法陣を貫くように勢いよく突き出す。

直後、闇のよりも暗い黒色の奔流が、妖弾も闇も月をも呑み込んだ。



「お？」

覚えのある特徴的な力を感じて、おもむろに紅い霧の立ちこめる夜空を見上げる。そこには、やはりというか天へと立ち上る黒色の柱があった。

「守彦の野郎、また真似しやがったな。性懲りもなく人の技を盗みやがって、何て奴だまったく」

ムツとした顔でその光景を見ると、黒い柱ともう一つ紅白の点を見つけた。反射的に、表情が焦りに変わってしまう。どうやら追いつかれてしまったようだ。

「マズいな。黒幕の本拠地手前で一番槍を逃すなんて、っと」
「無視するなー！！」

台詞を言い切る手前で、無数の氷柱が飛来した。それを軽く避けて振り向けば、氷の妖精が頬を膨らませて佇んでいる。

そういえば、絡まれていたんだった。完全に忘れていた。

「さいきよーのあたいを無視するんて、立場をわきまえないバカね。仕方ないから、あたいがアンタの立場を教えてあげるわ！！」
「ほほう。それはそれは」

八卦路を懐から取り出しながら、氷精の言葉にふむ、と頷く。確かに、立場を知るのは大切だ。

ニヤリと笑って、八卦路を構える。

「そうだな。わたしもアイツにも立場を教えてやるとするか。主に、本物と偽物のどっちが強いかについてな」

数分後、圧倒的な輝きを放つ光の奔流が哀れな氷精を呑み込んだ。



「おっ。魔理沙か？」

木々の隙間から見える少し遠くの空が、少し明るく輝いている。光源はきつと魔理沙の魔法もとい魔砲だろう。

『お主、これからどうするのじゃ？』

「まあ、アイツらに合流するさ。暴走しちまったら、相手してもらわねえとヤバいしな」

『ふむ』

「それに、異変の黒幕さんとやらもいるだろ。どうせなら、全員巻き込んで暴れてやるさ」

『して、本音は？』

「…………どうすりゃいいのか分かんねえ。暴れたくない。御都えも

ん助けて」

『僕は御都じゃ。御都衛門などではない』

頭の中で深い溜め息が響く。実に不思議な感覚だ。

『まあそれで良からうよ。他に策も無し。ならば、粘って足掻く他あるまい』

「何とかできねえのかよー……………」

『無理じゃな』

ノゾミガタタレター。

そんなアホなことを脳内で叫びながら、大きく肩を落とす。

「まあ、嘆くだけ時間の無駄か」

諦めたように溜め息をついて、俺は黒くて不気味な翼を広げた。そこで思い出したように、ポケットから取り出した飴玉をヒョイと放る。それは、木の幹に背中を預けていた妖怪の膝の上に落ちた。妖怪は完全に気を失っていて、反応は無い。

『トドメを刺さぬ上に施しか。最早甘いを越して呆れじゃな』

「うっせ。死なれたら後味悪いし、飴玉は慰謝料だ。これで手打ち、後腐れは無し、いいじゃねえかよ」

『……………安い慰謝料じゃの』

「うっせえ!!」

――バチバチバチ!!

「っ!？」

俺が叫ぶと同時、破裂音のような音が鳴る。見れば、破れていた妖怪のリボンが、一人でに修復していた。

まさか、もう回復するというのか。

「冗談キツいって……」

これ以上は付き合ってもらえない。

逃げるように、紅い霧の立ち込める空へ飛び立った。すぐに振り向く。追ってはこない。

「……………よし」

とりあえず、遠くに微かに見える湖へと飛んで行ってみよう。



守彦が飛んで行った数分後、宵闇の人喰い妖怪、ルーミアが目覚めます。

数秒程ぼんやりとしていたが、思い出したように頭を振って周囲を見渡す。だが、もうあの変な人間はどこにもいなかった。

ガッカリしたように俯くと、膝の上に何かが乗っているのに気が付いた。拾ってみるとそれは紙で、何かを包んでいる。紙を開くと、何か丸いものが入っていた。

（なんだろう？）

あの変な人間がわざわざ置いていったのだろうか。だとすると、毒かもしれない。

そう思い怪訝な眼で丸いものを睨みつけつつも、とりあえず丸いものを舐めてみることにした。

「……甘い」

口の中に放り込む。甘さが口全体に広がった。

口の中で丸いものを転がしながら、鼻歌混じりに闇を纏って空を飛ぶ。

あの人間は変な奴だが、実に美味しい物をくれた。もしかしたら、良い奴なのかもしれない。

また今度、あの変な人間を探してみることにしよう。

「こんな美味しい物をくれるんだもの。頼み込んだら、腕の一本や二本ぐらいくれるわよね」

少し遠い場所で、とある少年が突然背筋に走った悪寒に身震いした。

彼は善意で行った行動が必ずしもプラスに働く訳では無いことを、

まだ知らない。

捌ノ太刀 一タイムリミットは不明一（後書き）

楽園の素敵な巫女、博麗霊夢の
普通の魔法使い、霧雨魔理沙。

そして、飴を配って回る外来人、狹野守彦。

どうしてこうなった。

書いては全消し、書いては全消し。
そしてかれこれ1ヶ月。

今となっては何が気に入らなかったのか、過去の俺に問い詰めた
い。小一時間問い詰めた。

とにかく、お待たせしてすみません。

え？待ってない？

ですよー

では、また次回。

あ、そうだ。

皆さん、メリークリスマス（血涙）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4059t/>

東方魔刀矧

2011年12月25日19時46分発行